

令和3年度

# 研究集録

---

川越市教育委員会委嘱学校研究  
川越市教育委員会指定学校研究



川越市教育委員会

## あ い さ つ

川越市教育委員会教育長

新保 正俊

令和3年度学校研究の成果を、ここに「研究集録」として刊行することになりました。川越市教育委員会委嘱学校研究校8校及び指定学校研究校3校が、全職員の協力のもと真摯に研究に取り組まれたことに、心から敬意と謝意を表します。

本市では、第三次川越市教育振興基本計画において、基本理念「生きる力を育み未来を拓く川越市の教育」の実現に向けて、「志を高くもち、自ら学び、考え、行動する子どもの育成」を目標に掲げています。子どもたちが、変化の激しい社会を意欲的にたくましく生き抜くためには、変化を前向きに受け止め、自身に必要な知識や能力を認識し、それらを他者との関わり合いや実生活の中で活用し、実践できる主体的・能動的な力を育むことが必要であり、学校教育が果たす役割はますます重要となっています。

こうした中、各研究校では、自校の実態や課題を的確に把握した上で研究主題を設定し、川越市小・中学生学力向上プランに基づく授業改善、指導方法の工夫、学習環境の整備、ICTの効果的な活用、特別活動の充実、学校安全教育の推進等、教育活動をより深化・充実させる実践を重ねてこられました。

各学校の研究成果は、自信をもって自分の意見を発表する子どもたちの姿、災害から身を守るための行動を主体的に考える子どもたちの姿、共助の精神をもち、よりよい人間関係を築こうとする子どもたちの姿、ひたむきに運動に取り組む中で体育の楽しさを実感する子どもたちの姿など、子どもたちのよりよい変容となって表れております。特に、委嘱学校研究2年次の4校につきましては、学校の特色を生かした研究の成果を工夫された発表形式で発表され、多くの示唆を与えていただきました。

各学校におかれましては、本集録にまとめられた研究内容や成果を、個々の学校の状況に応じて教育活動をより活性化するための具体的な手立てとして積極的に活用されることを期待しております。そして、子どもたち一人ひとりの志や意欲、自己肯定感を高め、将来、よりよい社会や人生を自ら切り拓いていくことのできる力を育成するため、必要な資質・能力を育む教育の充実に向けた取組を一層推進していただきたいと思います。

結びに、研究に携わってこられた各学校及び地域・保護者の皆様の御尽力と、御指導いただいた関係各位に改めて感謝申し上げます。

# 目次

## 【委嘱学校研究〈2年次〉】

- 霞ヶ関西小学校  
「主体的に行動できる児童生徒の育成を目指す安全教育の推進」————— 1
- 山田小学校  
「ひたむきに運動に取り組む山田っ子の育成」————— 5  
～体育の楽しさを実感できる体育授業～
- 川越第一中学校  
「生徒同士の関わりを深める学級活動」————— 9  
～居心地のよい学級づくり～
- 霞ヶ関西中学校  
「主体的に行動できる生徒の育成を目指す安全教育の推進」————— 13  
～「生きる力」を育む防災教育の充実～

## 【委嘱学校研究〈1年次〉】

- 川越第一小学校  
「自分の考えをもち、自信をもって発信できる児童の育成」————— 17
- 今成小学校  
「学び合い・高め合い・鍛え合う児童の育成」————— 21  
～学びかがやく指導を通して～
- 初雁中学校  
「4技能5領域をバランスよく育成する英語教育」————— 25  
～デジタル教科書・ICTを活用した指導法の工夫～

## 【委嘱学校研究〈1年次〉・指定学校研究】

- 霞ヶ関小学校  
「主体的・対話的で深い学びの視点に立つ授業改善」————— 29  
～情報端末の活用を通して～

## 【指定学校研究】

- 新宿小学校  
「Chromebookの活用による主体的・対話的で深い学びの実現」————— 33
- 山田中学校  
「単元全体を通じた『主体的・対話的で深い学び』の実現について」—— 37  
～令和3年度 重点支援校としての取組～



## 研究主題

# 「主体的に行動できる児童生徒の育成を目指す安全教育の推進」

川越市立霞ヶ関西小学校

### 研究のポイント

- 防災意識を高める安全教育を全学年で系統性を持たせて行う。
- 避難訓練と授業研究会を通して児童の主体的に行動できるようにする。
- 外部の専門家の指導を受けて研究を推進していく。

## 1 研究の概要

### (1) 研究のねらい

本校は令和元年度より、文部科学省委託事業である「学校安全総合支援事業」を受け、安全教育の推進を行ってきた。昨年度まで、緊急地震速報端末を利用した避難訓練、外部講師を招いた交通安全教室、アドバイザーによる出前授業、授業研究会等を行ってきた。

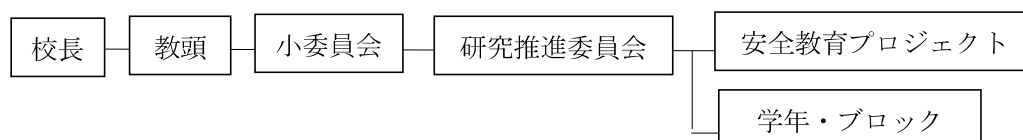
これらの実践を通して、教職員、児童の双方に安全に関する意識の向上が見られたこと、緊急地震速報が流れるとすぐに児童は机の下に避難することができるようになったことが成果としてあげられる。反面、課題としては、他校でも参考となる教育課程の編成やカリキュラムの作成を必要性があげられた。

そこで、今回の研究ではこれまで指導をいただいていた慶應義塾大学准教授の大木聖子氏に継続して指導を受け、各学年の指導計画を見直し、研究が終わっても同様の安全教育が行えるシステムを作れるようにしていきたいと考えた。

### (2) 研究主題設定理由

昨年度の研究において、災害時の身の守り方や学校内外の危険に対しての知識を身に付けることはできたが、大きな災害を自分事として捉えることはできていない。大きな災害が発生した時に、児童が自ら考え自ら行動できるように、本研究主題を設定して研究を進めることとした

### (3) 研究組織



## 2 研究の内容

- (1) 避難訓練の工夫改善
- (2) ショート訓練の実施
- (3) 授業研究会の実施
- (4) 職員研修会の実施
- (5) 安全教育を取り入れた年間指導計画の作成

### 3 実践事例

#### (1) 避難訓練の工夫改善

避難訓練実施レポートを使用して、教師一人一人が振り返り、成果や課題を文書化し、次の避難訓練にフィードバックし、訓練がより実践的で課題意識をもって行えるように工夫改善を行った。

##### ① 第1回 4月28日(水) 2校時

児童に避難訓練をすることを伝え、身を守るポーズ(さるのポーズ、だんごむしのポーズ)が確実にできるようにすることを目的に実施した。

##### ② 第2回 6月5日(土) 4校時

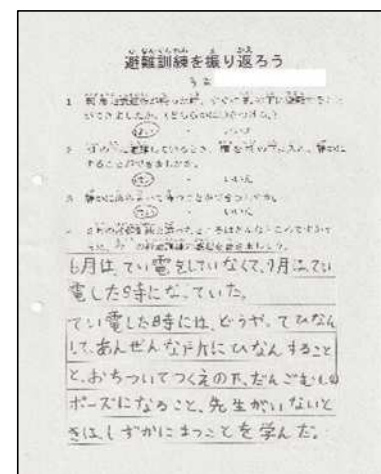
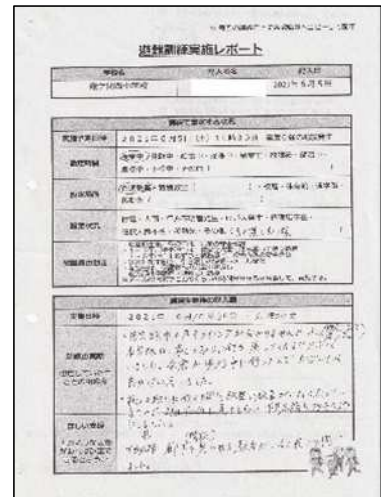
引き渡し訓練として実施した。帰りの支度や靴を取りに行っている際などに5回余震を入れ、とっさに児童が身を守るポーズをとれるようにすることを目的にした。

##### ③ 第3回 9月4日(2校時・4校時)

分散登校のため、2回実施。児童に予告せずに緊急地震速報を流し、自分の判断で身を守るポーズをとれるようにすることを目的にした。また、停電を想定し、放送設備を使用せず、ハンディマイクを使用し、チェックシートで安否確認を行った。

##### ④ 第4回 3学期予定

教員研修で行った「机上訓練」を生かし、地震でのケガ人発生を想定し、どの程度のけがで保健室に連れていくか共通の尺度をもち、教師が協力して児童を保健室に連れていく訓練とした。



#### (2) ショート訓練の実施

クラス単位で短い時間で行う避難訓練をショート避難訓練として行った。授業、給食、清掃、帰りの会などの時間を使い、緊急地震速報をCDで流し5分程度で終わる訓練を行った。

全学年で緊急地震速報を鳴らすと、児童がすぐに身を守るポーズができたと報告された。

#### (3) 授業研究会の実施

全学年で安全教育の授業を授業研究会として開催した。低・中・高・特支のブロックの1つずつを公開授業研究会として、他校の先生を招き、慶応義塾大学准教授大木氏と川越市教育委員会副主幹墨谷氏を指導者として研究協議会を行った。

##### ① 1年 小松裕子 学活

「自分の命は自分で守ろう(地震に備えて)」

1年生では、1学期に行った避難訓練で、緊急地震速報の音がなくても、急いで隠れようとしないう、地震を怖いと思っていない児童がいるという実態があったの

で、地震発生時に、「すぐに身を守る姿勢になる」を身につけさせたいと考えた。1年生という発達段階を考え、「頭を守る」ということに焦点化した。



② 2年 須田智美 学活

「自分の命は自分で守ろう（地震に備えて）」

地震は突然起こる。2年生では、掃除の時間に大きな地震が来たときにどのように行動したらよいか、考えられるようにした。自分事として考えられるように、自分たちが映っている写真を用いた。



③ 3年 八代和泉・和栗あかり 学活

「地震から身を守ろう」

3年生では、廊下や階段、特別教室などの教室外で地震が起きた時の避難行動について、考えられるようにした。地震が起きた時に、いつでも大人がそばにいるとは限らないため、担任不在時でも自分の身は自分で守れるようにすることをねらいとした。



④ 4年 粕谷祥二郎 社会科「水災害からくらしを守る」

4年生では、水害発生時の緊急対応や関係諸機関の連携、治水の行い方を学習する。そこで本題材では、災害から人々を守るそれらの働きを考慮した上で、自分の身を守るためにどうしたら良いかということについて考えられるようにした。この活動を通して、臨機応変に安全に身を守ることができる児童を育てることをねらいとした。



⑤ 5年 金子由香利 学活「大雨に備えて」

5年生では、大雨での避難情報の警戒レベルについて知ると共に、自分の命を守るためにいつ避難をしたらよいかを考えられるようにした。この活動を通して、自分がいる場所の危険度合い、自分の体の状態等によって避難するタイミングは異なることを知り、臨機応変に安全に身を守ることができる児童を育てることをねらいとした。



⑥ 6年 田村 司 学活

「自助から共助・公助へのステップアップ」

6年生では、震災直後の状況を想定し、災害時にどのように行動していくかを考えられるようにした。落ち着いて行動できる行動指針をもち、けがをしている人への適切な処置の方法を学習することで、震災直後に限らず、普段の生活の中においても、けがをした人に対して、自ら率先して助けたり、適切に行動できたりする児童を育てることをねらいとした。



⑦ 特支 細井俊久 学活

「地震から身を守る方法を身につけよう」

特別支援学級では、大きな地震が起こった時に「倒れてくるもの」「落ちてくるもの」「動いてくるもの」に気をつけること、「さるのポーズ」「だんごむしのポーズ」では、頭を守ることが大切なこと、頭を守るためには机の下にもぐったり、座布団やランドセルなどで頭を覆ったりすることを理解させることをねらいとした。



(4) 職員研修会の実施

① 机上訓練 9月4日(土)午後

これまでの震災で起こった事例を基に、教室にいる児童が次々にけがをしたり、心身の不調を訴えたりした状況の中で教師がどのように対応するか訓練を行った。

様々な児童がいる中で、一人一人の児童にどのように対応するか、教師の対応力が問われ、非常に考えさせられる研修会となった。

② 机上訓練を生かした避難訓練 1月13日(木)

地震発生後クラスがどのような状況になったか書かれた紙(アクションカード)を見ながら教師が連絡を取り合い、安否確認をしたり、歩けなくなった児童を想定し保健室に搬送したりする訓練を行った。

(5) 安全教育を取り入れた年間指導計画の作成

霞ヶ関西小の防災・安全教育の年間指導計画を作成した。A3版1枚に、学年毎にいつ、何の教科でどのような安全教育を行っていくか一覧にした年間指導計画を作成した。

4 研究の成果と課題

過去3年間の研究の成果として、児童の発達段階に応じて、状況に合わせた身の守り方について考えさせることができたこと。災害発生時に何が危険か、その危険から身を守るためにどのような行動をとればよいか主体的に考えられる児童が増えたことが挙げられる。

今後は、今年度実施できなかった小中合同引き渡し訓練の実施や引き渡し訓練後の保護者対象のアンケート調査、地域との合同避難訓練など、家庭・地域への防災意識の向上を小中で連携して進めていきたい。また、次年度以降も継続的に取り組み、本校の特色となるようにしていきたい。



## 研究主題

# 「ひたむきに運動に取り組む山田っ子の育成」

～体育の楽しさを実感できる体育授業～

川越市立山田小学校

### 研究のポイント

- 体育の教材の特性に対する教師の理解を基にした指導の工夫
- 仲間と協力して取り組む場を設定することによる協同学習
- 体育科授業を中心とした、授業規律の徹底

## 1 研究の概要

### (1) 研究のねらい

本研究では、教職員の体育科への深い教材理解を基に、「体育の楽しさ」を実感できる児童を育成することをねらいとした。文部省（当時）体育局体育官、筑波大学、横浜国立大学教授を歴任し、体育科教育の発展に寄与された高田典衛氏は、児童が運動の楽しさを実感できる要因として、「動く楽しさ」、「集う楽しさ」、「解る楽しさ」、「伸びる楽しさ」の4つの楽しさを掲げた。本校研究では、これらの楽しさが満たされたとき、児童は運動を楽しむことができた状況であると捉え、楽しさの追求から授業づくりに取り組んだ。

本研究における「ひたむきに」とは、運動に夢中で取り組む姿を想定している。夢中で取り組むことができるためには、単に体を動かしているだけでなく、教材のもっている特性を味わい、そのこつを探求しようとする姿も含意する。

上記のような児童の姿を実現できることが本研究におけるねらいであり、それに対する手立てを各学年、ブロックで検討しているところである。

### (2) 研究主題設定理由

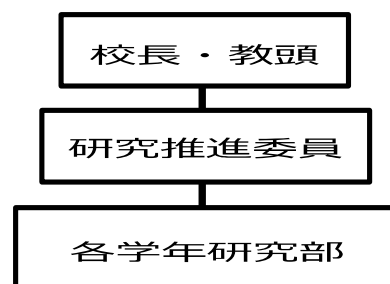
本校児童は、平成31年度新体力テストの結果における総合評価「A+B+C」の値が73%にとどまり、埼玉県の前年値から10%程度下回る数値となっている。また、「令和元年度全国体力・運動能力運動習慣調査」の結果から、体育が好きだと答える児童の数値が全国平均で男子73%、女子、60%であるのに対して、本校はそれぞれ10%以上下回る数値であった。これは、児童の体育離れによって、運動に対する苦手意識が大きくなり、結果として体力の低下が招かれていることが想定された。

そこで本研究を通して、「体育好きな児童」を育成することで、体力の向上も望めるのではないかと考えている。また、教職員アンケートから、「体育科の研究を通して、心身ともにたくましい児童の育成を図りたい」という意見もあり、生徒指導上の課題解決も念頭に、体育科の研究を進めることとした。

### (3) 研究組織

本校の研究組織は、従来の授業研究部や調査部といった専門部を設置せず、研究推進委員会で話し合った内容が直接学年に伝わるよう、右の図のような組織を作った。

授業の検討や、必要な教具・掲示物等を各学年研究部に割り振り、教材研究を深めながら授業準備できるようにした。







## 2 研究の内容











(仮説1) 運動の特性や魅力を味わわせる授業を展開すれば、体育の楽しさを実感できるであろう。

(仮説2) 仲間と協力して取り組む場を設ければ、体育の楽しさを実感できるであろう。  
 以下は、今年度実施した校内研修、校内研究授業、研究発表会である。

日時	内容	指導者
8/20	ひたむきに運動に取り組む山田っ子の育成 ～体育の楽しさを実感できる体育授業～ の実現をめざして	国士舘大学教授 細越 淳二 様 川越市教育委員会教育指導課指導主事 田中 正徳 様
10/11	体育授業参観研修会	川越市教育委員会教育指導課指導主事 田中 正徳 様
11/2	「ファイアーボールでクッパをたおせ！」 (ボールゲーム) 1年	川越市立古谷小学校教頭 高村 勉 様
	「めざせ！運動マスターへの道！」 (多様な動きを作る運動) 3年	川越市教育委員会教育指導課指導主事 田中 正徳 様
	「つかめ金メダル 山小オリンピック」 (ゴール型ゲーム) 5年	川越市立霞ヶ関小学校校長 金子 正樹 様
11/5	「わくわくマットランドを探検しよう！」 (マットを使った運動遊び) 2年	川越市立古谷小学校教頭 高村 勉 様
	「マッハで走り超せ！ハードルの達人」 (小型ハードル走) 4年	川越市教育委員会教育指導課指導主事 田中 正徳 様
	「目指せ！高跳び金メダル！」 (走り高跳び) 6年	川越市立霞ヶ関小学校校長 金子 正樹 様
	「打って、走って、キャッチング」 (ベースボール型) あすなる	川越市立教育センター第一分室リバーラ 田中 陽一郎 様

## 3 実践事例

学年	○「単元名」(教材名) □協議内容	・指導内容、工夫点 ☆指導講評
1年生	○「ファイアーボールでクッパをたおせ！」(ボールゲーム) ・的の重さや大きさを時間ごとに変え、ゲームの場に変化をもたせた。 ・導入からキャラクターに関係のあるストーリー性をもたせた単元計画をした。 ・的を当てるための工夫を選択肢の中から選ぶことができるようにした。 □片手上投げについて、もう片方の手を添えない方がよいのではないか。 □予備のボールを用意しておくとうい。 ☆話合いでは、各自が考えたことを伝える場にしたい。 ☆低学年は、遊びの中で多くの動きを経験させることが重要。	 
2年生	○「わくわくマットランドを探検しよう！」(マットを使った運動遊び) ・ストーリー性をもたせた場の設定をした。 ・お手本動画を各運動の場に設置し、いつでもポイントを確認できるようにした。 ・個人の能力に合わせた達成ラインを設けた。 □ポイントは、児童から出させる部分と教師が示す部分とがあってもよい。 □めあての達成度を視覚化させることができるとよい。 ☆見合いの場を設定するときは、どのようなところを見とよいか共通理解しておくとうい。 ☆めあてとまとめが正対するとうい。	 

3 年 生	<p>○「めざせ！運動マスターへの道！」(多様な動きを作る運動)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・運動モンスターをゲットするというストーリー性をもたせることで夢中に取り組めるようにした。</li> <li>・活動の範囲を個人、集団、全体と徐々に広げる指導展開にすることで、動きに発展性をもたせた。</li> <li>・新聞紙の棒を活用して、直接接触する機会ができるだけ少なくなるようにした。</li> </ul> <p>□ケンステップなどの具体的な目安があってもよい。 □褒める言葉が多く、児童同士の信頼関係があった。 ☆目標とする数を具体的に示すことで、児童が進んで取り組めるようになる。 ☆振り返りの時に内容にふれて、書かせるとよい。</p>	 
4 年 生	<p>○「マッハで走りこせ！ハードルの達人」(小型ハードル走)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ハードルに対する恐怖心を取り除くための教具の工夫。</li> <li>・感覚づくりの運動で、リズムよく楽しく走りこす喜びを実感できるようにした。</li> <li>・児童が互いのよい動きを見付けることができるように、タブレットを活用した見合いの場を設定した。</li> </ul> <p>□インターバルだけでなく、高さも変えられるとよい。 □指導の意図に合わせたタブレット端末の活用について。 ☆オノマトペを使うなどして、児童にとってイメージしやすくとよい。 ☆声のトーンを変えて声がけすると指導に緩急が付く。</p>	 
5 年 生	<p>○「つかめ金メダル 山小オリンピック」(ゴール型ゲーム)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・作戦ボードを活用して、動きを可視化した。</li> <li>・グリッドを活用したコートにした。</li> <li>・確実に技能が向上するように、スパイラル型の単元計画にした。</li> </ul> <p>□チームとしての振り返りと、個人としての振り返りをはっきりさせるとよい。 □コートのはりさは、児童の実態に合わせてその都度調整するとよい。 ☆1時間の流れを示すときに、時刻も書いてあると効率よく動ける。 ☆経験のある児童は、見本の見せ方や声のかけ方を考えるとよい。</p>	 
6 年 生	<p>○「目指せ！高跳び金メダル！」(走り高跳び)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・グループで競い合うような競技性をもたせた。</li> <li>・初回の記録からどの程度伸びたかを競わせることで、自己の記録の更新を目指す単元構成にした。</li> <li>・各時間で指導したポイントを視覚化した。</li> </ul> <p>□感覚づくりの運動では、もっとはさみ跳びを意識したものになるとよいのではないかと。 □助走のスタートラインや踏切のラインがあってもよかった。 ☆安全な着地の仕方を指導する。 ☆ゴム紐で慣れてきたら、竹バーでチャレンジするとよい。 ☆失敗事例は教師から示すとよい。</p>	 
あ す な る	<p>○「打って、走って、キャッチング」(ベースボール型)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・運動に主体的に取り組むことができるよう、児童が各自で作ったバットを利用した。送球、捕球だけでなくバッティングも注目して単元を計画した。</li> <li>・児童一人一人の特性を考慮し、わかりやすいルールにした。</li> </ul> <p>□バットは段ボールだけでなく、他の材料を使ってもよい。 □バットやボールを選ばせ、それによって得点が変わるというルールの工夫があってもよい。 ☆スモールステップで、個に応じた支援を準備するとよい。 ☆子供を飽きさせないように、テンポよく進めるとよい。</p>	 

## 4 研究の成果と課題

### (1) 成果

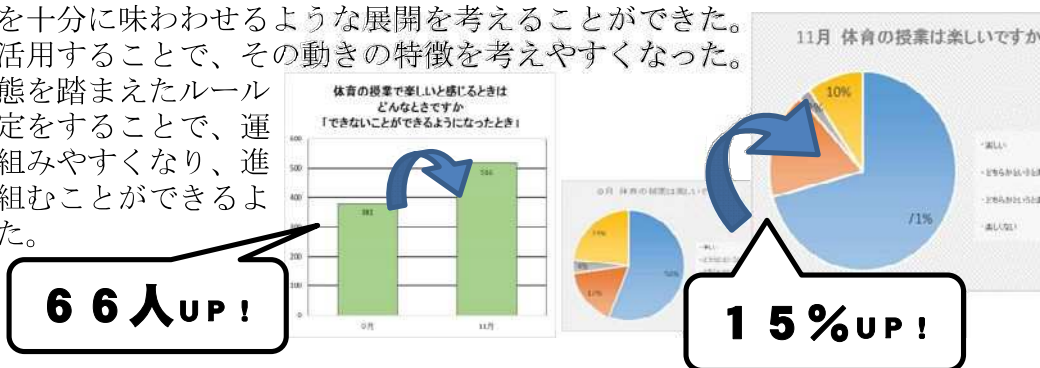
①仮説1「運動の特性や魅力を味わわせる授業展開すれば、体育の楽しさを実感できるであろう」

<アンケート結果より>

- ・「体育の授業が楽しい」、「どちらかというと楽しい」と答える児童が、令和3年9月に実施したアンケートでは、73%だったのが、88%になり、15%向上した。
- ・「運動が好き」と答えた児童が、9月、12月ともに90%以上の高い水準を維持し、「体育の授業が好きだ」と答える児童も90%以上の高い水準を維持した。
- ・体育授業アンケート「体育授業で楽しいと感じるときはなんですか」の項目で、「できないことができるようになったとき」と答えた児童が、66人増えて、304人になった。

<考察>

- ・それぞれの教材の一般的特性を共通理解し、それを基に教材研究を進めたことで教材の魅力を十分に味わわせるような展開を考えることができた。
- ・ICTを活用することで、その動きの特徴を考えやすくなった。
- ・児童の実態を踏まえたルールや場の設定をすることで、運動に取り組みやすくなり、進んで取り組むことができるようになった。



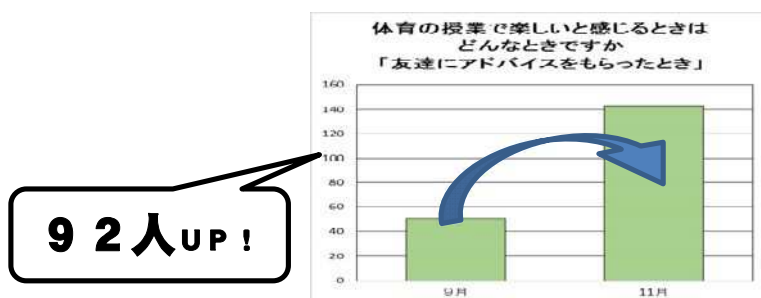
②仮説2「仲間と協力して取り組む場を設ければ、体育の楽しさを実感できるであろう」

<アンケート結果より>

- ・体育授業アンケート「体育授業で楽しいと感じるときはなんですか」の項目で、「友達にアドバイスをもらったとき」と答えた児童が、92人増えて、143人になり、伝え合いが機能していた。
- ・体育ノートに、友達の動きや発言を取り入れて書くことができる児童が増えた。

<考察>

- ・友達とアドバイスを伝え合う場面では、タブレット端末を活用することで具体的に動きを振り返ることができた。
- ・伝え合いの場を設けることで、友達の動きからよい動きを学び取ろうとする姿勢が育ってきた。



### (2) 課題

- ・タブレット端末の活用と運動量の確保を両立させるための方法を今後も検討していく必要がある。
- ・「体育の授業が好きではない」と答えた児童が、女子14人、男子9人おりその大半が「運動が好きではない」と答える児童が多かった。運動が好きでない児童も魅力を感じられるよう、授業展開を今後も検討する必要がある。
- ・個に応じた指導につき、学習指導要領等を基に今後も検討が必要である。

# 「生徒同士の関わりを深める学級活動」

## ～居心地のよい学級づくり～

川越市立川越第一中学校

### 研究のポイント

- 生徒同士の関わりを深める活動の研究をする。
  - 他者と折り合いをつける力を育成する。
- 学級担任、学年職員、教科担当と連携を図り、よりよい学級集団の形成を目指す。

## 1 研究の概要

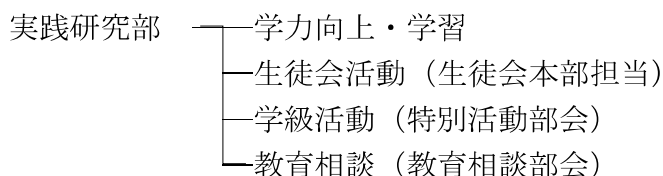
### (1) 研究のねらい

本校では、令和2年度より、生徒の主体性、自己肯定感の向上を目指し、自己有用感を育むことに主眼を置いて、「居心地のよい学級づくり」を目指して、授業改善や学級活動(1)の研究を進めてきた。年間2回行う人権アンケートでは、自己肯定感、コミュニケーションに関わる項目が低くなっている。また、「自分は周りからどう思われているのか」という課題を克服していく為に、自分に自信をもっていくことやコミュニケーション力を鍛え、自分の思いや考え、意見を相手にしっかりと伝えることをねらいとしている。

### (2) 研究主題設定理由

令和3年度の本校のグランドデザインは「笑顔と活力あふれる学校」である。「笑顔あふれる」では、居心地のよい学校・学級を、「活力あふれる」では、生徒と教職員の力を結集することを目標としている。また、居心地のよさとは、落ち着いた学級の雰囲気や自分の思い、考え、意見を伝えることができ、受け入れてくれる環境を生徒と共に創っていくことが大切であり、本校の生徒の実態を鑑み、学級活動を通して生徒に折り合いをつけることを身につけてほしいと考え、本主題を設定した。

### (3) 研究組織



情報研究部 先進校（調布市立調布中学校）を視察し、授業改善（思考ツール）やカリキュラム・マネジメントについての実践を学ぶ。  
全国特別活動研究協議会埼玉大会に参加し、代表校の実践事例を学ぶ。

調査研究部 学校研究アンケートの分析、人権アンケートの分析

## 2 研究の内容

学校教育目標 自主 練磨 敬愛

目指す生徒像 自律できる生徒 努力し続ける生徒 仲間と協働する生徒

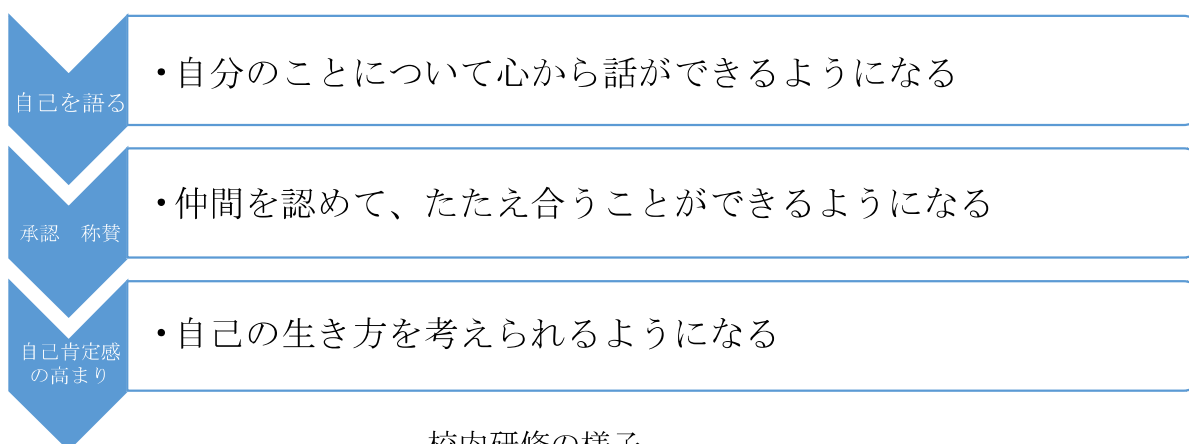
(1) 研究主題「生徒同士の関わりを深める学級活動～居心地のよい学級づくり～」

(2) 目指す生徒像

「自分と本気で向き合い、自己の生き方を考えられる生徒」

目指す生徒像の具現化	◎一人一人が自分の意見をもつ	◎一人一人が相手の意見を真剣に聴く	◎一人一人が自信をもって、自分の意見を発表する
望ましい生徒の行動とプロセス	〔各教科〕 各単元の振り返りの場面で自分の意見をもつ。 〔学級や学年〕 集団の課題を自分のこととして捉え、自分がどのような力を発揮していくかを考える。	・相手が話しやすい環境をつくる（相づちや質問など） ・相手がどのような意見をもっているのかを判断する。 ・自分の意見と違う場合は、相手の意見に補足し、双方の良さを見つけて生かしていく。（折り合いの付け方）	・支持的風土が出来上がる。 ↓ ・自分に自信がつく。 ↓ ・発表をすることができる。 ・ただ発信するだけでなく、他者の意見を受け入れて、考えを深める。

以上のことから、本校の研究のモデルを設定した。



校内研修の様子

## 3 実践事例

(1) 校内研修「特別活動の基礎・基本」

川越市立教育センター澁谷茂之指導主事  
(令和3年4月26日)



(2) 校内研修「一中の特活」 実践研究部 学級活動  
(令和3年5月10日)

(3) 学級活動 議題「クラスの課題について」「生徒総会資料の読み合わせ」  
(令和3年5月27日、6月中旬)

(4) 全国特別活動研究協議大会への参加 情報研究部  
(令和3年8月20日)

(5) 学級活動 プレ授業

#### 1年・議題

「合唱祭に向けて学級のスローガンを決めよう」

- ・指導を受け、事前準備、話し合い、決まったことを実践する、全体を見て子どもたちの特別活動の評価をしていくことが大切であるということを改めて学んだ。
- ・話し合いの流れが滞ってしまったときに、司会が上手く機能していなかったため、議長団への指導の時間がもっとほしいと感じた。

#### 2年・議題

「合唱祭成功のための取組を考えよう」

- ・意見を組み合わせることや1つの意見に条件付けをし、よりよくするなど、折り合いの付け方について考えて発表できた。
- ・司会グループが止まってしまう場面があったので、次回はしっかりと事前指導で想定させて臨みたい。

#### 2年 学級会



#### 3年・議題

「中学校生活の残り半年でなりたいクラス」

- ・なるべく多くの生徒から意見を引き出すための工夫をしながら、意見をまとめることができた。
- ・話し合い活動の経験が不足していたため、時間配分やまとめ方が上手くいかず、多数決に偏ってしまうことが多かった。

(6) 学級活動 オープン発表

#### 1年・議題

「SDGsの観点で学級をよりよくするための取組を考えよう」

#### 1年 学級会

指導者 川越市教育委員会  
教育指導課  
小松悦子指導主事

指導 合意形成においては、投票による多数決ではなく「こうだから(理由)、この意見がよい(決定)」という理由づけと納得による合意にさせるとよい。また、自らの思考を踏まえた決定意思をもつためには、しっかりと振り返りを書かせることが大切である。



## 2年 学級会

### 2年・議題

「学級目標を達成するための取組を考えよう」

指導者 川越市教育委員会

学校教育部教育センター 澁谷茂之指導主事

指導 学級活動委員への事前指導を充実させることで、学級会での話し合いを深められたり、充実した進行につながられたりすることができる。また、効率よく意見の集約を行うことで、学級会を行うハードルを下げ、話し合う機会を増やすことにつながった。



### 3年・議題

「後輩たちの残したい思いをどのように伝えるか」

指導者 川越市教育委員会

教育指導課

千代田和也指導主事

指導 教員が多く言葉がけをせずにタイミングを見て話し合いの軌道修正をしていた。生徒一人一人が自分の意見をきちんともっており、急に指名されたときも自分の意見を答えられていた。

## 3年 学級会



## 4 研究の成果と課題

### 成果

学校研究における3つの柱は、特別活動だけ行うものではなく、教科領域等指導を含めた全教育活動を通して継続的に行い、積み重ねによって育成するものであるという重要性を再認識できた。

また、「自分の意見をもつ」ことについて、GIGA スクール構想の一環である、Chromebookを活用した事前アンケートや調査研究が行えた。その結果、一人一人の意見を視覚的に見ることや、一人一人の伸び率の分析をし、学級活動委員会での話し合いを充実させることもできた。

「自信をもって自分の意見を発表する」について、相手の意見を真剣に聴き、「発言をつなげる（意見の連鎖）」により、生徒自身が、考えをより深めていったり、自己の考え方の変容を感じ取ったりすることができた。（折り合いのつけ方、合意形成）

### 課題

「自分の意見をもつ」について、議題提案の段階では、集団の諸問題を自分事として捉えられず、事前アンケートの入力が滞ってしまう生徒もいた。「相手の意見を真剣に聴く」は、「発言をつなげる（意見の連鎖）」につながっていく。より考えを深めていく力は、相手の思いを受け取り、自分と向き合うことで培われていく。その力を習得するのは時間がかかり、学級会や授業の中での幅広い学習の積み重ねがとても大切であることがわかった。

「自信をもって自分の意見を発表する」ためには、事前に学級活動委員会を充実させ、提案者や学級活動委員とともに、その学級会を想定した指導や話し合いの見通しがもてるように提案理由を練り上げることで、合意形成に向けた話し合いを充実させられることがわかった。



## 研究主題

# 「主体的に行動できる生徒の育成を目指す安全教育の推進」 ～「生きる力」を育む防災教育の充実～

川越市立霞ヶ関西中学校

## 研究のポイント

- 小中9年間を通じた、「自助」から「共助」への防災教育カリキュラムを実践する。
- 外部の専門家の指導の下、最新の研究成果を実践に取り入れる。

## 1 研究の概要

### (1) 研究のねらい

本校は令和元年度に文部科学省委託事業（埼玉県教育委員会再委託事業）「学校安全総合支援事業」のモデル校に川越市教育委員会より指定を受け、防災教育を中心とした安全教育の指導法の研究を地震学者である慶應義塾大学の大木聖子准教授のご指導の下に取り組んだ。この一年間の研究により、生徒達が災害を自分事として捉えられるようになったのは大きな成果であった。本校の安全教育をさらに充実させるためには、この生徒の意識の変容をさらに進化させることが重要となる。

そこで、引き続き令和2・3年度に川越市教育委員会並びに川越市教育研究会の委嘱を受け、継続して大木准教授のご指導を受けながら防災教育を中心とした安全教育の研究に取り組むこととした。

これまでの取組を継承・発展させ、防災に関する意識調査の実施、避難訓練の改善、学年ごとのテーマ学習、職員研修の工夫などを計画的に行うことで充実した安全教育の実現を図る。そして、それらの活動を通して、安全確保のために主体的に行動できる生徒を育成することが本研究のねらいである。

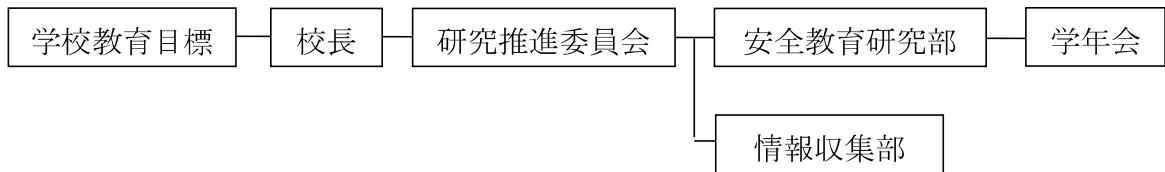
### (2) 研究主題設定理由

「「生きる力」を育む防災教育の展開」（H25.3 文部科学省）には、「中学校段階における防災教育の目標」として「日常の備えや的確な判断のもと主体的に行動するとともに、地域の防災活動や災害時の助け合いの大切さを理解し、すすんで活動できる生徒」を育成することが示されている。

しかし、本校生徒の実態は、令和2年7月に緊急地震速報が発令された直後に行ったアンケート調査の結果を見ると、「教員が近くにいない時に自分たちで考えて行動できるか心配だった」、「自分一人だったらと考えると怖くなった」、「突然のことで焦ってしまい、すぐに身を守ることができなかった」などの感想があり、自分で判断して行動することに課題があることが分かった。

大きな災害への備えや災害が発生した際の対応について、本校生徒は自ら判断して行動に移すことに課題があり、いざ大災害が起きた時の安全確保に大きな不安がある。そこで、本研究主題を設定して研究を進めることとした。

### (3) 研究組織



## 2 研究の内容

- (1) 防災意識アンケートの実施（1回目）
- (2) アンケート結果の分析
- (3) 避難訓練の工夫・改善
- (4) 学年ごとのテーマ学習の実施
  - 1年生 「家庭の防災計画書作り」
  - 2年生 「避難所運営4コマ漫画」
  - 3年生 「防災小説」
  - 特別支援学級 「防災ポーチ作り」
- (5) P T A家庭教育学級の実施
- (6) 防災意識アンケートの実施（2回目）
- (7) アンケート結果の分析と検証

**防災学習アンケート 川越市立鷹ヶ岡西中学校**

学年・名前：  
 \_\_\_\_\_年 \_\_\_\_\_組 \_\_\_\_\_番 名前：\_\_\_\_\_

あなたがひとりで震下敷しているときに地震が起きたら、以下のことができますか。

① 落ちついて身を守る	できる	たぶんできる	たぶんできない	できない
② 学校に行くか家に帰るか避難場所へ行くかを自分で決めて、行ける	できる	たぶんできる	たぶんできない	できない
③ 安全な道を選ぶ	できる	たぶんできる	たぶんできない	できない
④ 避難した場所にとどまる	できる	たぶんできる	たぶんできない	できない

あなたは、自然災害下避難が起きた時、自分の家のまわりでどんなことが起こるが知っているですか。

知っている  知らない

あなたの家は、災害に備えて何か準備をしていますか。

① 水や食料を保存している	している	していない	わからない
② 非常用持ち出し袋を用意している	している	していない	わからない
③ 強い地震を想定している	している	していない	わからない
④ 家具の置き方を注意している	している	していない	わからない
⑤ ガラスにフィルムを貼っている	している	していない	わからない
⑥ 家が地震に耐えられるか確認した	している	していない	わからない
⑦ 家族で防災会議を開いた	している	していない	わからない
⑧ 家族で災害時の約束をしている	している	していない	わからない

⑨ その他（もしあれば）：\_\_\_\_\_

## 3 実践事例

### (1) 余震や停電を想定した避難訓練の実施

様々な被災状況に対応できる防災体制を整えるため、以下の工夫を取り入れて余震や停電を想定した避難訓練を実施した。

#### ① トランシーバーとチェックリストを活用した情報共有

停電によって放送設備が使えなくなること  
 を想定して、各階にトランシーバーを設置した。  
 各教室にチェックリストを置き、いつどのよう  
 な状況で発災しても、生徒の安否確認と適切な  
 対応ができるように訓練を行った。

**発災直後チェックリスト【普通教室】**

1年1組 担当者： \_\_\_\_\_ 居場所：1年1組教室

在籍	欠席	遅・早	現数	不明	緑	黄	赤
29							

メモ \_\_\_\_\_

緑：OK  
 黄：受け皿が、置換がある  
 赤：受け皿、置換がない

#### ② 可能な限り実際の災害に近づけた訓練の実施

通常は学級担任が避難訓練を指導するが、実際の災害は授業中や休み時間に起こる可能性もある。そこで、より効果的な訓練を行うため、授業者による学級指導、事務員など全職員の参加、避難者や保護者対応を行動リストに入れて訓練を実施した。細かな役割は定めずに基本方針を共有し、その場で判断することを重視した。

実際に訓練を行うと、トランシーバーの混線や授業者から担任への引き継ぎなど、様々な改善点が見つかった。川越市で推奨している避難訓練実施レポートを活用することで、1つ1つ改善して災害に対する備えを充実させていく。

## (2) 学年ごとのテーマ学習

「自助」から「共助」に向けて発達段階に応じてテーマを設定し、3年間を見通した防災教育カリキュラムを実践する。

### ① 1年生 「家庭の防災計画書作り」【自助】

災害に対してどのような備えが必要かを具体的に考えさせることで「自助」の能力を育成する。そして、生徒達に授業で学んだことを家庭に持ち帰らせ、家庭の中で防災のリーダー的役割を果たさせ、発災に備えての準備、発災後の対応、家庭内のルール作り等の大切さについて保護者に働きかけられるようにすることをねらいとしている。授業後、保護者から「災害について家族で話し合うとても良い機会になった」という反応を得て、授業実践の手応えを感じた。

### ② 2年生 「避難所運営4コマ漫画」【共助】

本教材は大木准教授が開発した、災害時の避難所運営を疑似体験する演習型の防災教育教材である。本教材は避難所で「困った問題」が発生している1～3コマの漫画に続く、空欄になっている4コマ目の避難所運営者のセリフを考えるとというものである。避難所運営側として避難者に伝えるセリフを考える中で、災害時の場面が自分にも起こり得ることとしてリアルにイメージすることをねらいとしている。

生徒達は学習を通して、中学1年生までに学習した自らの安全確保や家庭の防災計画（自助）の重要性に加えて、地域の防災や災害時の助け合いの重要性（共助）を理解し、主体的に活動に参加しようとする態度を育成することができたと考える。

### ③ 3年生 「防災小説・全国オンライン発表会」【自助・共助】

本教材は大木准教授が開発した、まだ起きていない震災について自分の体験談のように綴る防災教育教材である。日時や天気などの条件を定め、発災時に自分や家族はどこで何をしているか、町の様子はどうかなどを自分が主人公の物語として、「物語は必ず希望を持って終えること」というルールの下で小説を書く。

生徒達は学習を通して、震災に対して自分事として捉えることができるようになった。そして、災害直後の対応についてだけでなく、事前の災害への備えや災害後の避難所運営や町の復興、さらには日頃の生活の仕方にまで考えが及ぶようになり、「生きる力」の育成につなげることができた。

今年度は、本校と同じように大木准教授のご指導の下、防災小説に取り組んでいる全国の中学校とオンラインで交流会を行い、各校の防災小説の発表を行った。様々な地域の特色が表れた発表を聞くことで、防災小説の学びを深めることができた。

### ④ 特別支援学級 「防災ポーチ作り」【自助】

本教材は大木准教授が開発した、外出時に最低限の備えを持ち歩くためのポーチを作る防災教育教材である。地震がいつ起きかわからない状況では、家に防災用品を備えていても、外出中は対応することができない。そこで、「命を守るために必要な物」「あったら便利な物」「心がほっとする物」の3つのポイントから、防災ポーチにどんな物を入れればよいかを考える学習である。

### (3) P T A家庭教育学級の実施

生涯にわたり災害に適切に対応できる能力を育て、生きる力を育むためには、家庭や地域における教育も必要であり、そのためには学校、家庭、地域社会との連携が欠かせない。しかし、本研究を始めるにあたり本校生徒へ「家庭での災害への備え」についてアンケートを実施した結果を見ると、家庭の防災への意識の低さが窺い知ることができた。そこで、保護者と防災教育の重要性を共有し、保護者の意識を高めるためにP T A家庭教育学級で、心肺蘇生法（A E D）講習や大木准教授を講師にお招きした講演会を企画し、本校P T Aと霞ヶ関西小学校P T Aの合同開催として実施した。

## 4 研究の成果と課題

### (1) 成果

#### ① 防災意識アンケートの結果分析と生徒の人間的な変容

年度当初に行ったアンケート結果と比較をすると、首都直下型地震の際に身の回りに起こることをイメージできる生徒が21.2%から54.8%に増加し、災害時に家族と集合する場所を決めている生徒も19.2%から44.6%に増加した。

また、数値に表れない部分ではあるが、防災教育を通して共助の精神を育むことで、他者を理解することや良い人間関係を築くことの大切さに気づき、あいさつができる生徒が増え、生徒の人間的な成長を感じることができた。

#### ② 防災教育についての職員の意識変化

本研究に取り組むまでは、本校の防災教育は教員が各教科の学習として、防災に関わる内容を指導し、学期ごとにパターン化された避難訓練を行っていた。そのような中で、本研究に取り組んだことにより、教員自らが高い意識を持ち防災教育の重要性を自覚することができるようになり、避難訓練をより実践的な訓練に改善し、自助・共助の能力を育成するための指導について計画的に取り組むようになった。

#### ③ ぼうさい甲子園「しなやか with コロナ賞」の受賞

ぼうさい甲子園とは、阪神・淡路大震災の経験と教訓を継承するために様々な教育団体の防災教育を顕彰する、毎日新聞主催の教育事業である。本年度、本校の取り組みをまとめ応募をしたところ、「しなやか with コロナ賞」を受賞することができた。全国の防災教育の取り組みを知ることで、さらなる励みとなった。

### (2) 課題と今後の展望

発災時には、教員だけで生徒の命と安全を守ることは困難である。また、地震発生後に避難所が開設された場合、市、学校、地域が連携して運営を行っていくことになる。昨年度、市の「防災タイムライン」が作成されたことで市と学校の連携についてはマニュアル化されたが、学校と地域社会との連携についての取り決めはなく、地域住民の防災に対する意識の高さがどの程度であるか不明であり不安である。保護者と地域住民に呼びかけて、例えば避難所運営のシミュレーションを行うなどして、連携する体制づくりを行い、今後は地域の防災拠点として発展していきたい。

## 「自分の考えをもち、自信をもって発信できる児童の育成」

川越市立川越第一小学校

### 研究のポイント

- 学習したことを生かして、自分の考えをもつための、教科横断型のカリキュラムマネジメント作成
- 自分の表現方法で仲間と考えを交流するための思考ツールやICTの効果的な活用

### 1 研究の概要

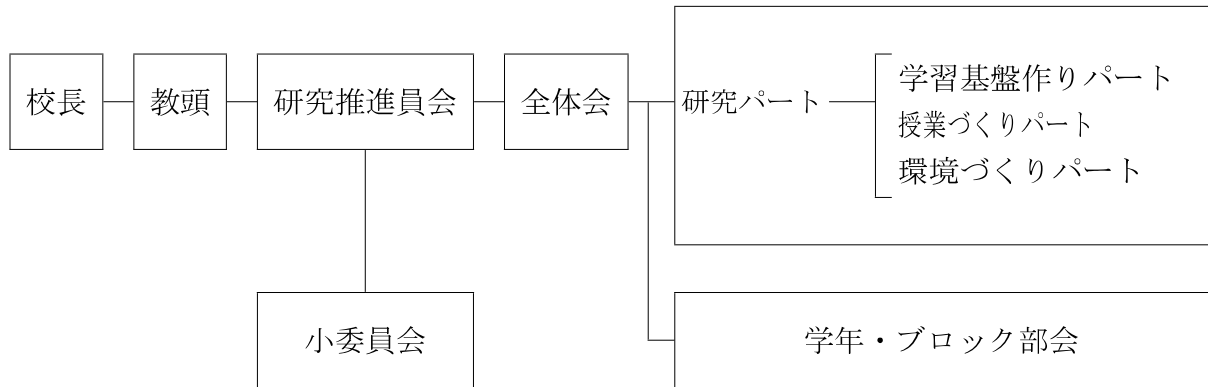
#### (1) 研究のねらい

本校の教育目標は「命をだいに」「人をだいに」「心をだいに」「物をだいに」であり、これらを「四つのだいに」と呼び、日々、この目標を意識して教育活動を行っている。令和3年度（2021年度）、4年度（2022年度）の2年間、川越市教育委員会及び川越市教育研究会の研究委嘱を受け、本校の課題でもあり、これからの時代に必要な力、「発信力」を育てる研究に取り組んできた。全職員で共通の認識をもって指導に当たるため、「発信」の定義を「多くの人に目的を持って主体的に伝えること」とした。また「発信力」は、日々の授業の中で自らの経験や既習事項を生かして新たな考えを作り出したり、他者の様々な考えを学び合ったり、他者に自分の新たな考えを作り出すための材料を支援助言してもらったりすることで、育むことができると考えた。そこで、研究主題を「自分の考えをもち、自信をもって発信できる 児童の育成」とし、自分の考えをもって相手に伝えていくことで相手に認められ、自信をもって発信することができる児童の育成を図ることを目指した研究に取り組むことにした。

#### (2) 研究主題設定理由

本校は、『四つのだいに』アンケートを毎学期行っている。その項目に「進んで発表していますか。」について課題を持っている児童が多くみられた。また、教師も日頃の授業の様子から、話す・発表する・伝える・表現する等に課題があると考えた。そこから考えられる原因として、自分の考えが持てないからではないのか。さらに自信をもって発信する力が弱いからではないかと考えた。そこで、自分の考えを持つためにはどのような授業をすればよいのか、自信をもって発信するには、どのような力がつけばよいのか、研究をしていくことにした。また、単に話型を示したり、学習形態を整えたり、話し方スキルを向上したりするものではないなど話し合いを重ね、研修を重ねた。その結果、自信をもって発信できるよう上記の研究主題を設定した。

### (3) 研究組織



## 2 研究の内容

本校の研究主題に沿い、目指す児童像を「自信をもって発信する児童」と設定した。さらに、この目指す児童像に向けて「①学習したことを生かして、自分の考えをもつ」「②自分の表現方法で仲間と考えを交流する」「③学び合う活動を通して、自信をもって発信する」の3つを具体的な研究の視点として設定した。達成のための手立てとして、それぞれ「①カリキュラムマネジメントの作成」「②思考ツール・ICTの効果的な活用」「③話し合いの仕方の工夫」を柱に、各学年、研究に取り組んだ。今年度は教科を絞らず、学年ごとに研究したい教科を決め、社会・算数・理科・生活・道徳・総合で研究を行った。そのため、児童が発信するためのさらに具体的な手立てとして「10の重点」を設け、日々の指導に生かしたり、授業研究会で全学年共通の視点として、協議に生かしたりした。

## 3 実践事例

### (1) 各学年の授業実践

#### ① 1年生 「たのしい あき いっぱい」 ～生活科～

ウェビングマップを使って「おすすめのあき」の言葉をたくさん出し合った。



自分の探した物やノート、写真を使ってペアで紹介し合った。



話のつながり方、児童から出た受け止め方の例などを掲示した。

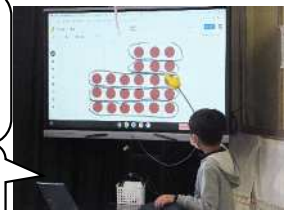


#### ② 2年生 「かけ算（2）九九をつくろう」 ～算数科～

ペアの話し合いでは自分の考えをクロムブックを使って説明し、「しつもん名人」として出された話し合いのポイントを参考に受け答えをし合った。



全体の話し合いでは、友達の質問や考えを受けて自分の考えを説明した。



③ 3年生 「わたしたちの暮らしをささえる人々の仕事」 ～社会科～

3人グループで役割を決め、司会が質問内容を整理しながら対話を促し、話し合いを進めた。

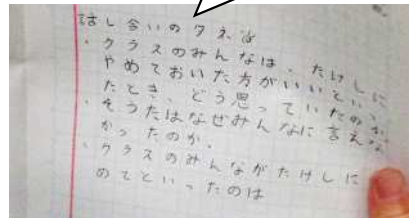
話し合った内容をグループでまとめ、ホワイトボードに貼り付けて共通点や相違点を探し、全体のまとめをした。動画で実際にスーパーマーケットの方にも話をしていただいた。



④ 4年生 「クラスたいこう全員リレー」 ～道徳科～

「学びを深める対話」として年間を通して話し合いに視点を持たせ、日常的にペア→3人組と内容に応じて人数も変え、話し合いを進めた。

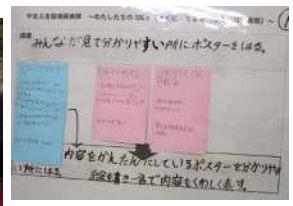
「話し合いのタネ」で自分の考えを道徳ノートに書き、考えを明確にして共通点や相違点をはっきりさせた。



⑤ 5年生 「やまぶき環境探検隊」 ～総合的な学習の時間～

自分の考えを黄色の付箋に書き、3人グループで共通点や相違点を見つながらグループの提案をまとめた。

グループの代表が他グループでプレゼンテーションをしてよい点、課題点を赤・青の付箋で貼ってもらい、その意見を元に修正をした。



⑥ 6年生 「水よう液の性質」 ～理科～

5人グループで役割を明確にし、クリティカルシンキングでよりよい考えにまとめるレベルアップ会議を行った。

実験結果を写真に撮り、電子黒板に映して書き込みながら全体に説明をした。

Yチャートを使用し、思考を整理した。



(2) カリキュラムマネジメントを意識した授業の実践

学習したことを生かして自分の考えを持つためには、今行っている教科や単元の学習がどの教科のどの単元とつながっているのかを意識して授業を展開したり、児童が意識をして学習に取り組んだりすることが重要であると考え、カリキュラムマネジメントに取り組んだ。それぞれの学年で、国語を軸として、他教科とのつながりや目指す児童像につながっていくような内容を中心につながりを整理し、授業を展開した。

令和3年度 3年 年間指導計画

	4月	5月	6月	7月	8・9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
社会	学校のまわりのようす	私たちの川越市		職業の人たちの仕事	お祭りの人たちの仕事	お祭りの準備と準備	お祭りの準備と準備から暮らしの様子		人々の暮らしのつながりの		
算数	わり算 物価の増減の割合	わり算の応用	わり算の応用	わり算の応用	わり算の応用	わり算の応用	わり算の応用	わり算の応用	わり算の応用	わり算の応用	わり算の応用
理科	自然を豊かにする 生物多様性の重要性	自然を豊かにする	自然を豊かにする	自然を豊かにする	自然を豊かにする	自然を豊かにする	自然を豊かにする	自然を豊かにする	自然を豊かにする	自然を豊かにする	自然を豊かにする
音楽	音楽で心を豊かにしよう	音楽で心を豊かにしよう	音楽で心を豊かにしよう	音楽で心を豊かにしよう	音楽で心を豊かにしよう	音楽で心を豊かにしよう	音楽で心を豊かにしよう	音楽で心を豊かにしよう	音楽で心を豊かにしよう	音楽で心を豊かにしよう	音楽で心を豊かにしよう
国語	伝えたいことを伝える	伝えたいことを伝える	伝えたいことを伝える	伝えたいことを伝える	伝えたいことを伝える	伝えたいことを伝える	伝えたいことを伝える	伝えたいことを伝える	伝えたいことを伝える	伝えたいことを伝える	伝えたいことを伝える
かかわり	小探検隊			小江戸あつげ隊			入道さ川越				
外国語	Unit 1 How are you?	Unit 2 How are you?	Unit 3 How are you?	Unit 4 How are you?	Unit 5 What do you like?	Unit 6 ALPHABET	Unit 7 What are you doing?	Unit 8 What are you doing?	Unit 9 Who are you?		
道徳	自分から始める	自分から始める	自分から始める	自分から始める	自分から始める	自分から始める	自分から始める	自分から始める	自分から始める	自分から始める	自分から始める
学活	学習の習慣づくり	学習の習慣づくり	学習の習慣づくり	学習の習慣づくり	学習の習慣づくり	学習の習慣づくり	学習の習慣づくり	学習の習慣づくり	学習の習慣づくり	学習の習慣づくり	学習の習慣づくり
図工	絵の具と水のイメージ	絵の具と水のイメージ	絵の具と水のイメージ	絵の具と水のイメージ	絵の具と水のイメージ	絵の具と水のイメージ	絵の具と水のイメージ	絵の具と水のイメージ	絵の具と水のイメージ	絵の具と水のイメージ	絵の具と水のイメージ
体育	かけっこ・リレー	かけっこ・リレー	かけっこ・リレー	かけっこ・リレー	かけっこ・リレー	かけっこ・リレー	かけっこ・リレー	かけっこ・リレー	かけっこ・リレー	かけっこ・リレー	かけっこ・リレー

(3) KPT法による研究協議会の実施

研究協議会では、クロームブックのジャムボードを用いてグループ協議を行った。企業等で行っている実践例を参考にし、クロームブックを使用して2つの視点の「KEEP・PROBLEM」が一覧で分かりやすいように形式を整えた。グループごとにページを作り、参加の職員には協議会が始まる前からグループ協議の前半にかけて付箋にそれぞれ意見を入力してもらい、お互いに内容が見られるようにした。グループ協議で話し合った内容を2ページ目の「TRY」に打ち込み、全体の協議の場でモニターに映し、指導者からも見えるようにした。また、付箋を誰もが自由に動かすことのできる特徴を生かし、似ている意見ごとに固めておくことで意見の整理もしやすくなった。

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ① カリキュラムマネジメントを作成し、それぞれの教科間のつながり意識した授業の実践を行ったことで、発信の力が身についた。
- ② 思考ツール・ICTの活用により、表現方法の幅が増え、多様な児童が自分の考えを表現することができた。
- ③ 学年の実態に応じて話し合い方を工夫し、発達段階に応じた対話を工夫して、学び合いを深めることができた。

(2) 課題

- ① 話し合いの質を児童の実態に応じて見直し、更に深められるようにする。
- ② 系統性を踏まえながら、話し合いの方法（人数・形態など）をさらに多様にし、単元や教科に応じて児童がより発信できるようにする。
- ③ 今年度の実践を生かし、学年の実態や発達段階を意識した、効果的な思考ツールを選んで使用できるようにする。



## 研究主題

# 「学び合い・高め合い・鍛え合う児童の育成」

～学びがかがやく指導を通して～

学校名 川越市立今成小学校

### 研究のポイント

- 国語部と算数部での活動を軸とする。
- 特別活動部・生徒指導部・情報教育部・学校図書館部と連携を図り、多方面から児童の力を高める。

## 1 研究の概要

### (1) 研究のねらい

本校では、平成28年度から令和元年度まで「学習したことを活用し主体的に学習に取り組む児童の育成」を主題とし、国語科・読むことの領域を中心とした指導の研究に取り組んできた。研究を通して、「声のものさし表」を設置したり「文の組み立て表」を作成することで、学校全体で意識を共有しながら、児童も教師も学習に取り組むことができた。また、授業で、「何のために本時の学びがあるのか」の意識付けや、単元計画を児童に配布し、学習の流れの意識付けを進めていくことで授業の見直しをした。さらに、家庭での学習習慣を身につけさせるべく、家庭と連携して自主学習に日常的に取り組ませた結果、研究の成果として「主体性」の伸びがみられた。

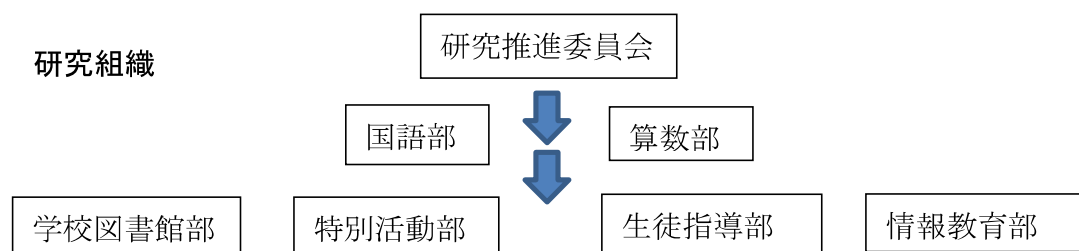
そこで、令和2年度からは、国語科中心の研究から、他教科の研究へ場を広げた実践を行い、「主体的」な態度を一層伸ばし、「主体的・対話的」な学習を基盤とした「深い学び」に結びつけていく事が大切であり、そのためには、学校研究を通して全職員が共通理解と共通行動をもって取り組むことが効果的であると考え、研究のねらいとした。

### (2) 研究主題設定理由

本校の児童の実態は、授業での理解はできるが、基礎学力の習熟状況に個人差があり、即習事項を活用できないだけでなく、語彙に乏しく、自分の考えを伝えることが苦手な児童が少なくない。さらに、家庭学習が定着していない児童もいる。このことを踏まえ、基礎・基本を確実に身に付けさせ、学習意欲をさらに高めていきたと考えた。以上のことから、本校の学校教育目標である「仲よく 勉強 元気な子」、目指す学校像である「一人ひとりが、いつでもかがやく学校」の具現化を目指し、本校の指導の重点である「基礎・基本を身に付け、学習に前向きに取り組む子」「学ぶ喜びを感じ、自分の考えを深めたり広めたりする子」と設定し、考える力や活用する力の育成、どの教科でも実践できる全教職員共通の指導法の確立に取り組むこととした。

そこで、研究主題を「学び合い・高め合い・鍛え合う児童の育成」副題を学びがかがやく指導を通して」として、考える力や活用する力の育成、どの教科でも実践できる全職員共通の指導法の確立に取り組むこととした。児童の実態を正しく把握し、学習規律を確立し、分かりやすい授業を創造すれば、「学び合い・高め合い・鍛え合う」児童が育成を図ることを目指した研究に取り組むこととした。

### (3) 研究組織



## 2 研究の内容

令和2年度は、研究発表に向けての立案、実践を通して、具体的な研究の取組を決めていった。令和3年度では、1年目の研究を踏まえて実践・検証をしていく。本校の研究は、一人ひとりの協力がなければ、全職員・児童の力は育てることも、力を発揮することもできない。

今年度は、国語科・算数科だけでなく、学校図書館、特別活動、生徒指導も研究を推進した。情報教育では「ICTの活用」、学校図書館では「家庭との連携」、学級経営が授業づくりの基盤となると考えた。これらの一つ一つの学習活動が噛み合っていくことで、「学び合い・高め合い・鍛え合う児童」育成ができると考え、「①学習内容が定着すれば、学習に前向きに取り組むようになるであろう。」「②わかる・できる喜びを味わわせれば、自分の考えを広げたり深めたりする児童が育つであろう。」という仮説を立て、具体的な手立てを考え、取り組んできた。

## 3 実践事例

### 【生徒指導部】の取り組み

#### ① 今成学び09の作成と周知

～今成小学び09～ 教職員用

① 活用目的	活用場面	活用方法	活用効果
1. 授業時	① 授業中の導入・展開・まとめの場面に活用する。	① 児童が自分の学習状況を振り返り、学習の進捗を確認する。	① 児童の学習意欲を高める。
2. 授業時	② 授業中の振り返り・まとめの場面に活用する。	② 児童が自分の学習状況を振り返り、学習の進捗を確認する。	② 児童の学習意欲を高める。
3. 授業時	③ 授業中の振り返り・まとめの場面に活用する。	③ 児童が自分の学習状況を振り返り、学習の進捗を確認する。	③ 児童の学習意欲を高める。
4. 授業時	④ 授業中の振り返り・まとめの場面に活用する。	④ 児童が自分の学習状況を振り返り、学習の進捗を確認する。	④ 児童の学習意欲を高める。
5. 授業時	⑤ 授業中の振り返り・まとめの場面に活用する。	⑤ 児童が自分の学習状況を振り返り、学習の進捗を確認する。	⑤ 児童の学習意欲を高める。
6. 授業時	⑥ 授業中の振り返り・まとめの場面に活用する。	⑥ 児童が自分の学習状況を振り返り、学習の進捗を確認する。	⑥ 児童の学習意欲を高める。
7. 授業時	⑦ 授業中の振り返り・まとめの場面に活用する。	⑦ 児童が自分の学習状況を振り返り、学習の進捗を確認する。	⑦ 児童の学習意欲を高める。
8. 授業時	⑧ 授業中の振り返り・まとめの場面に活用する。	⑧ 児童が自分の学習状況を振り返り、学習の進捗を確認する。	⑧ 児童の学習意欲を高める。
9. 授業時	⑨ 授業中の振り返り・まとめの場面に活用する。	⑨ 児童が自分の学習状況を振り返り、学習の進捗を確認する。	⑨ 児童の学習意欲を高める。
10. 授業時	⑩ 授業中の振り返り・まとめの場面に活用する。	⑩ 児童が自分の学習状況を振り返り、学習の進捗を確認する。	⑩ 児童の学習意欲を高める。
11. 授業時	⑪ 授業中の振り返り・まとめの場面に活用する。	⑪ 児童が自分の学習状況を振り返り、学習の進捗を確認する。	⑪ 児童の学習意欲を高める。
12. 授業時	⑫ 授業中の振り返り・まとめの場面に活用する。	⑫ 児童が自分の学習状況を振り返り、学習の進捗を確認する。	⑫ 児童の学習意欲を高める。
13. 授業時	⑬ 授業中の振り返り・まとめの場面に活用する。	⑬ 児童が自分の学習状況を振り返り、学習の進捗を確認する。	⑬ 児童の学習意欲を高める。
14. 授業時	⑭ 授業中の振り返り・まとめの場面に活用する。	⑭ 児童が自分の学習状況を振り返り、学習の進捗を確認する。	⑭ 児童の学習意欲を高める。
15. 授業時	⑮ 授業中の振り返り・まとめの場面に活用する。	⑮ 児童が自分の学習状況を振り返り、学習の進捗を確認する。	⑮ 児童の学習意欲を高める。
16. 授業時	⑯ 授業中の振り返り・まとめの場面に活用する。	⑯ 児童が自分の学習状況を振り返り、学習の進捗を確認する。	⑯ 児童の学習意欲を高める。
17. 授業時	⑰ 授業中の振り返り・まとめの場面に活用する。	⑰ 児童が自分の学習状況を振り返り、学習の進捗を確認する。	⑰ 児童の学習意欲を高める。
18. 授業時	⑱ 授業中の振り返り・まとめの場面に活用する。	⑱ 児童が自分の学習状況を振り返り、学習の進捗を確認する。	⑱ 児童の学習意欲を高める。
19. 授業時	⑲ 授業中の振り返り・まとめの場面に活用する。	⑲ 児童が自分の学習状況を振り返り、学習の進捗を確認する。	⑲ 児童の学習意欲を高める。
20. 授業時	⑳ 授業中の振り返り・まとめの場面に活用する。	⑳ 児童が自分の学習状況を振り返り、学習の進捗を確認する。	⑳ 児童の学習意欲を高める。

児童と教職員に対して、学習規律を統一し、学習環境を整えるねらいがある。

#### ② 振り返りの視点を設定

- 今成小  
振り返りのポイント
- ① 今までとくらべてできるようになったこと。
  - ② まどめを見ながら
  - ③ 「なぜ」「なるほど」と思ったこと。
  - ④ 理由をつけて(理由もしつかり)。

学びを自分のものとして定着、実感させる。成長・変容をじかくする。

#### ② 無言清掃への取り組み

授業を受けているときと同様に、集中して取り組んでいる。落ち着いた学校生活を送れるようになる。

### 【特別活動部】の取り組み

#### ① 学級会ハンドブックの作成



発表の仕方、自分の意見を伝えられる雰囲気作りのために、どの学級でも同じような質の学級会が行えるように作成した。

#### ② 学級会グッズの作成

#### ③ 取り組み状況調査・情報共有



学級会の実施回数とこれまで取り組んだ議題の共有

### 【学校図書館部】の取り組み

#### ① 「うちどく」の実施

月に1回、家読(うちどく)に取り組みます。

月に1回、うちどくの日を決めてうちどくをしよう！

テレビを消して、スマホを置いて、静かに15分

- ・親子で本を読む(大人は新聞などでも)・大人が読み聞かせをする
- ・子どもが読み聞かせをする・同じ本を読んで、感想を親子で交流し合う
- ・子どもが借りてきた本を読む
- ・親子で市立図書館へ行って、本を借りてくるのもいいですね。

9月のうちどく 月 日 ( )

読んだ本(自分が読んだ本や、お家の人が読んだ本)

様々な家庭環境があることから、まずは日にちを決めずに月に1回実施をする。テレビを消し、スマホを置いて、静かに15分間、読書をしったり読み聞かせをする。

② 図書館便りの発行

読書推進の協力や「うちどく」の働き

③ リクエストカードの作成

授業で使う本を用意してもらう

③ 図書館活用計画表

【情報教育部】の取り組み

① 学校研究アンケート

教職員・保護者へのI C T機器の使用・活用研修

児童・保護者向けのオンライン授業を想定した学習用ノートPCのマニュアル作成



③ 授業での活用

発表では、スライドやジャムボードを使い、効果的な発表を行った。

【国語部】の取り組み

① 即習事項の掲示



既習事項を掲示することで、学びの活性化を図る。ここでは「性格」を表す言葉を掲示した。

② 単元の計画の掲示

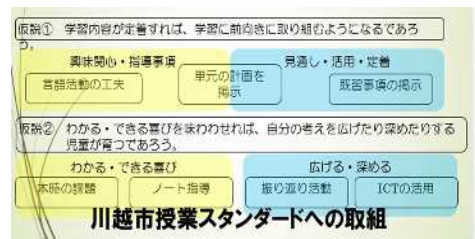


単元の見通しをもたせる工夫

② I C Tの活用



川越市授業スタンダード化の実践



【算数部】の取り組み

① 1時間当たりの学習の流れを統一「算数・数学の問題発見・解決の過程」



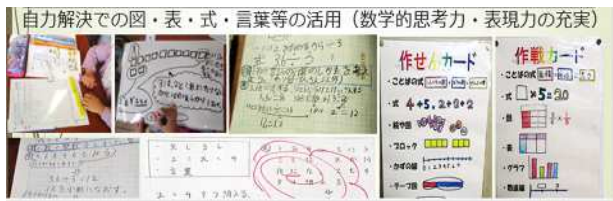
②ノートの書き方の統一



③即習事項や学習の見通しの掲示



※自力解決での図・表・式・言葉等の活用



授業冒頭1分半でのスキルアップ実践



4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ① 児童の学びに対する姿勢（共通理解・共通行動）をよりよくするために作成した、「今成学び09」が学校全体で指導され、実施している。
  - ・「学習の準備」「時間を守る」項目における児童アンケートからも浸透してきている。
- ② 振り返りの視点が浸透してきている。
  - ・児童自身の振り返りから判断できる。
- ③ 児童が落ち着いて学校生活を送くれている。
  - ・無言清掃への取り組みや授業を受けている姿勢から判断できる。
- ④ 川越市授業スタンダードが実践されている。
  - ・埼玉県学力学習状況調査・入間地区学力テストから、学力の伸びが伺える。
- ⑤ 今成小 授業改善スタイルR3が実施されている。
  - ・学習過程、引き出したい児童の反応・発言、授業改善の視点を理解し、児童、教員が、授業を迷い無く行えている。

(2) 課題

学び合い・深め合い・鍛え合うために

- ① ICTの活用方法
  - ・どの場面で、どのような形で活用することが最適なのかを日々の授業で模索し、検証していく必要がある。
- ② 他教科での実践
  - ・誰が行っても、確実に実践でき継続していく必要がある。

## 研究主題

# 「4技能5領域をバランスよく育成する英語教育」

～デジタル教科書・ICTを活用した指導法の工夫～

川越市立初雁中学校

## 研究のポイント

- 文部科学省委託事業「小・中・高等学校を通じた英語教育強化事業」による、令和3年度埼玉県英語指導方法改善事業の研修協力校の1校として、校区内の月越小学校との連携を中心に研究を進める。
- 全学年でGTEC(Global Test of English Communication)を実施し、全生徒の4技能の力を分析した結果を用いて研究を進める。

## 1 研究の概要

### (1) 研究のねらい

本校は、令和3年度埼玉県英語指導方法改善事業(文部科学省委嘱「小・中・高等学校を通じた英語教育強化事業」)における研修協力校として、小学校との連携を通じて、「4技能5領域をバランスよく育成する英語教育」に取り組む。また、文部科学省「学習者用デジタル教科書普及促進事業」を活用し、デジタル教科書やICTを活用した指導法の工夫について研究を進め、生徒の英語における語学力の向上を目指す。

### (2) 研究主題設定理由

新学習指導要領の趣旨を体現するために、「4技能5領域をバランスよく育成する英語教育」が必要である。そのために、従来の指導方法の見直し、新しい教科書についてのより深い教材研究が求められる。また、小学校と中学校、それぞれの指導の特性を理解しつつ、発達段階や学習状況を踏まえた指導を行わなければならない。さらに、GIGAスクール構想によって1人1台端末が導入されたことを生かし、学習者用デジタル教科書の活用方法を模索する良い機会である。

### (3) 研究組織

本校と校区内の3小学校で「英語教育強化事業研究推進委員会」を組織し、研究を進めるとともに、英語科教員1名が生徒指導加配の兼務発令を受け、3小学校を月1～2回訪問して小学校教員とのT・Tを行っている。

## 2 研究の内容

### (1) 本校英語科の重点目標

- ① ICTを効果的に活用した授業の実践
- ② 言語活動の充実を目指した授業改善の推進
- ③ 指導計画の作成と指導改善のための指導・評価サイクルの確立

## (2) 指導形態の工夫

本校の英語科教員の構成（5名）を生かし、第1・2学年の授業では全ての時間でティーム・ティーチング（T・T）とし、きめ細かな指導を行っている（週4時間中3時間を日本人教員同士のT・T、残りの1時間をAETとのT・T）。第3学年ではT・Tを実施していないが、担当教員（2名）それぞれの個性を生かしつつ、共通の教材を用いた綿密な打ち合わせのもとに授業を展開している。

## (3) 定期的な英語部会の開催

時間割を調整し、毎週1回は英語部会を実施している。指導方法、評価方法等について話し合い、授業改善に生かしている。

## (4) 小・中学校合同研修の実施

- ・初雁中学校区4校夏季合同研修会

講師 東京国際大学言語コミュニケーション学部 松林 世志子 教授

演題 「小・中学校を通じた英語教育の強化」

## (5) ICTを効果的に活用した指導方法の工夫の例

- ・Google Documentの音声入力機能を用いた、発音・音読練習
- ・Google Documentで作文練習、GoogleFormを利用した小テスト
- ・カメラの動画撮影を利用したスピーチの発表 等

## (6) 学習者用デジタル教科書の活用

文部科学省「学習者用デジタル教科書普及促進事業」により、本校の生徒は現在、外国語(英語)のデジタル教科書を全生徒が3学年分(3冊分)使用することができる。効果的な活用方法等について研究を進めている。

## (7) GTECの活用(令和3年5月実施)

第1・2学年でGTEC Juniorを、第3学年でGTEC Coreを活用して、全生徒の4技能の力を測定し、分析した。結果は、全学年で全国平均を超えていた。スピーキングに課題があることが分かった。

## (8) 小中学校との連携

英語科教員1名を校区内3校対象に兼務発令の申請をした。その3校を月1～2回訪問して小学校教員とのT・Tを行っている。指導方法の共通理解や、児童の実態把握を行っている(生徒指導推進事業とも兼ねている)。

## 3 実践事例

### (1) 小・中学校の連携

英語科教員1名を校区内3校対象に兼務発令の申請をし、3校を月1～2回(月越小(第1、3木曜日)、川越小(第2木曜日)、今成小(第4木曜日))訪問して小学校教員とのティーム・ティーチング(T・T)を行っている。授業においては、T3の立ち位置(HRTがT1、AETがT2)で、AETが説明しづらい部分(発音や日本語で説明をした方が分かりやすいことなど)のフォローを行ったり、机間指導をして児童の活動をサポートしたり、スピーチ原稿の添削を行ったりしている。

令和3年8月20日には、初雁中学校区4校夏季合同研修会を実施した(初雁中学校、月越小学校、川越小学校、今成小学校の教職員が参加)。東京国際大学言語コミュニケーション学部 松林 世志子 教授に講師を依頼し、「小・中学校を通じた英語教育の強化」という演題でご講演いただいた。また、小・中学校での指導方法や指導内容の共通理解を行った。

令和4年2月1日、本校の1年生と小学6年生が英語でオンラインによる交流授業を行った。グループに分かれ、中学1年生は小学生に中学校の魅力を工夫して伝え、小学6年生は中学校について知りたいことを質問し、中学生が答える、という活動を行った。



## (2) 指導形態等の工夫

本校の英語科教員の構成（5名）を生かし、第1・2学年の授業では全ての時間でT・Tとし、きめ細かな指導を行っている（週4時間中3時間を日本人教員同士のT・T、残りの1時間をAET（英語指導助手）とのT・T）。第3学年ではT・Tを実施していないが、担当教員（2名）それぞれの個性を生かしつつ、共通の教材を用いた綿密な打ち合わせのもとに授業を展開している。また、時間割を調整し、毎週1回（水曜日の6時間目）は英語部会を実施している。指導方法、評価方法等について話し合い、授業改善に生かしている。

## (3) GTECの実施

1年生はGTEC Juniorを、2年生はGTEC Juniorを、3年生はGTEC Coreを実施した。結果として、全国平均を超えていた。課題はスピーキングにあることが分かった。

## (4) ICTを効果的に活用した指導方法の工夫

### 【学習者用コンピュータ（Chromebook）の機能を用いた取組】

- ・Google Documentの音声入力機能を用いた、発音・音読練習
- ・Google Documentで作文練習
- ・Google Formsをつかった小テスト
- ・1min. Small Talk
- ・カメラの動画撮影を利用したスピーチの発表 など

### 【マイク付きヘッドホンの活用（第3学年）】

複数の生徒が学習者用コンピュータから直接音声を出して音読練習等をする時、生徒が音声に集中できないことがあるため、マイク付きヘッドホンを3年生に貸与している。また、マイクがあると、生徒の発音などを録音する際に活用することができる。

## (5) 学習者用デジタル教科書の活用

文部科学省「学習者用デジタル教科書普及促進事業」により、本校の生徒は現在、外国語(英語)のデジタル教科書を閲覧・使用することができる。閲覧・使用に当たっては、「Lentrance(レントランス)※ Reader」を活用する（今回はクラウド配信方式を採用している）。

生徒には、Lentrance Readerを活用するためのアカウント情報(学校ID・ログイン

ID・パスワード)が割り当てられている。このアカウント情報があれば、生徒はどこからでもデジタル教科書にアクセスできる。

※Lentrance(レントランス)とは、デジタル教科書をはじめ、学校用教材、通信教育、塾など、多様な教育コンテンツ・サービスに対応した学びのためのICTプラットフォームです。

授業や家庭学習など、効果的な活用場面、活用方法等についても、研究を進めている。最大の利点は、音声に容易にアクセスできることである。

一方、学習者用デジタル教科書については、以下の点において改善が必要であると考える。

- ・生徒全員のアカウント登録、IDとパスワードの発行に時間がかかること
- ・発行者が複数の場合は、生徒が複数のIDやパスワードを管理する必要があること
- ・安定したインターネットの環境がないとログイン等の準備に時間がかかること
- ・教師用デジタル教科書内にはある便利なコンテンツが、学習者用デジタル教科書には含まれていない場合があること
- ・書き込み機能の使用が煩雑であること
- ・クラウド上にある生徒の学習履歴の閲覧が難しいことや、データの保存がいつまで行われるのかが不透明なこと

#### 4 研究の成果と課題

##### (1) 令和3年度埼玉県学力学習状況調査より

中学2年生	本校	62.1	県	62.6	伸び率	-
中学3年生	本校	61.2	県	60.0	伸び率	78.0

##### (2) 3年生GTECの結果から

CEFR A1レベル相当以上の英語力を有する生徒が41.1%いることが分かった。その後の授業の見取りや川越市中学生学力調査等の結果から、CEFR A1レベル相当以上の英語力を有する生徒は50%を超えていると考えられる。

○GTECの結果分析を通して、生徒への指導方針を立てることができた。

○普通の授業の中で、4技能5領域をバランスよく育成する方法について、英語科教員が共有することができた。

○小学校の学習内容や指導方法について理解を深めることができた。

○小中連携の意義について再認識することができた。

○生徒が学習者用コンピュータの扱いに習熟し、学習効率が上がった。

##### (3) 課題及び改善点

① 小・中学校の連携をより強化していく必要がある。そのために、ICTも効果的に活用しながら、定期的に小・中合同の研修会を開催したり、小・中合同の授業研究会等を実施したりして、児童生徒の円滑な学びの接続ができるようにしていく。

② 学習者用デジタル教科書を使用することが目的化しないように、学習者用デジタル教科書の活用に適している場面を精選する必要がある。

③ 研究に充てる時間を十分に確保するために、教材研究等を協力して行う等の工夫が必要である。



# 「主体的・対話的で深い学びの視点に立つ授業改善」

～情報端末の活用を通して～

川越市立霞ヶ関小学校

## 研究のポイント

- ① 本校の学習過程（Kasumistyle）の継承・発展
- ② 情報端末の活用の模索
- ③ スクラム事業を活用した低学力児童への対応
- ④ 教科担任制による専門的指導の保障

## 1 研究の概要

### (1) 研究の仮説

情報端末の活用を視野に入れた「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善を行うことによって、質の高い学びが実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力が身に付くであろう。

### (2) 研究主題設定理由

主体的・対話的で深い学びの視点に立った問題解決的学習の本校の学習過程（Kasumistyle）が、過去の学校研究の中で確立され、継承発展しつつ現年度を迎えている。しかし、人事異動によるスタッフの入れ替わりや、特に今年度においては「コロナ渦」による「対話的学び」の制限など、さらなる工夫や改善が急務となっている。さらに、GIGA スクール構想により、一人一台端末の時代を迎え、活用方法の模索が始まっているところである。そこで、過去の成果を発展させるとともに、新しい技術の力を十分に活用するための研究を進めていきたい。

### (3) 研究組織

#### 研究推進委員会

- ――授業研究部 (Kasumistyle の確認・発展)  
(情報端末を活用しての授業の研究)
- ――タブレット部 (情報端末活用についての情報収集)  
(授業研究部への情報提供・合同研究)
- ――検証部 (各種手立ての効果検証)
- ――環境整備部 (スクラム事業による個別指導の計画)  
(学習環境の整備)

## 2 研究の内容

- 1 学期
  - ・研究の方向性を決定していく。
  - ・端末活用などの情報を収集する。先進校研究。
  - ・有識者の講演による研修
- 夏休み
  - ・試行的な授業研究の開発
- 2 学期
  - ・授業研究の実施、手立ての検証（学年1）
  - ・方向性の修正、仮説・手立ての練り直し
  - ・埼玉県学力学習状況調査の分析
- 3 学期
  - ・研究初年度のまとめ

## 3 実践事例

### 第4学年1組 国語科学習指導案（抜粋）

○単元名・教材名 一番心に残った場面の感想を4年生のみんなと交流しよう「ごんぎつね」

#### ○教材観

本教材は、ひとりぼっち同士の中心人物であるごんと兵十との関係の変容を描いた物語である。ごんの兵十に対する気持ちの変化は、それぞれの場面のごんの行動や心内語などに注目して読み取らせたい。一方、兵十については、「六」の場面でのごんに対する気持ちの変化を読み取ることが重要であるが、ごんと直接関わる「一」の場面やごんの行動などは知らずにそれについて話している「四」の場面とも関連付けながら考えさせたい。本教材が愛され続ける理由の一つに、民話的な語りと色彩豊かな情景描写が挙げられる。四年生には馴染みのない表現が多いが、そのことも、学びへの意欲へとつながっている。物語の結末は、悲劇的でありながら静かな余韻を残し、読者の心を揺さぶる。児童の多様な感想を引き出すことができる教材である。

○本時の学習指導（本時 10 / 13時）

#### （1）目標

登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わり結び付けて具体的に想像することができる。

＜思考力・判断力・表現力等＞C（1）エ

#### （2）評価規準

登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わり結び付けて具体的に想像している。

＜思考力・判断力・表現力等＞C（1）エ

(3) 展開 (抜粋)

学習活動	教師の発問(○) 予想される児童の反応(・)	評価規準(◇) 支援(⇒) 指導上の留意点(○)	時間
<p>1 微音読をする。</p> <p>2 本時の学習課題をつかむ</p>		<p>○学習の準備をした児童から音読をさせる。⇒音読が苦手な児童を中心に正しい発音、速さ、姿勢を机間指導していく。</p> <p>○正しい発音や速さ、姿勢で読めるようにする。</p>	<p>導入 5分</p>
<p>課題 なぜ、ごんは、ぐったりしながらもうなずいたのでしょうか。</p>			
<p>3 前時までの学習内容を確認する。</p> <p>4 クライマックス場面でのごんの変容を読み取る。 ・個人→グループ→全体で交流</p> <p>まとめ 5 うなずいたわけを自分の言葉でまとめる。</p>	<p>○視点が変わったのは、どこだろう。・語り手が変わっている。・兵十の視点・ごんの視点</p> <p>○どうして「うなずきました。」だけ視点が変わったのだろう。・中心人物が大きく変わったところだから。</p> <p>○中心人物と対人物の心情曲線をJamboardに表そう。・ごんは打たれてしまって悲しいので、距離は離れる。・打たれてしまったけれど、自分だと気付いてもらえたので、距離は縮む。</p> <p>○ワークシートに、ごんがうなずいたわけを書こう。・どうしても兵十につぐないをしていたことを分かってもらいたかったから。・やっと、兵十と心が通じてうれしかったから。</p>	<p>○子供たちから引き出したことを短冊にして掲示していく。</p> <p>○ごんと兵十の心情の変化をつかみ、クライマックスで初めて二人の心の距離が一致することに気付かせる。⇒叙述を基に根拠を書くこと、友達の意見を聞いて考えが変わったところ、意見が変わらなかった人は、その理由も伝えるよう指導する。</p> <p>○全員に視点を示すために、ひとりぼっちのごんは、つぐないにこだわってきたことを助言する。</p>	<p>展開 35分</p>

		<p>◇評価規準 【思・判・表】</p> <p>・登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わり結び付けて具体的に想像している。C(1)エ</p> <p>&lt;評価方法&gt;ワークシート</p> <p>・ごんの行動と気持ちの変容を結び付けてまとめている児童をBとする。</p> <p>&lt;「努力を要する」状況(C)への手立て&gt;</p> <p>・心情曲線やつぐないの言葉を使ってまとめるよう助言する。</p>	
6 本時の学習の振り返りをする。	○Google Classroomからフォームで振り返り課題を提出しよう。	○中心人物の行動から、気持ちの変化を捉えることができたか、心情曲線を表すことによって登場人物の変容を理解できたかを振り返らせる。	振り返り 5分

#### 4 研究の成果(◎)と課題(▲)

- ◎ 学力は大きく伸びている。埼玉県学力学習状況調査では、第5学年を例にとると、「学力レベルの伸び」では、<国語>埼玉県がレベル1の伸びであったのに対し、本校はレベル4の伸びとなっている。<算数>は県、本校とも同じレベル3の伸びである。また、「伸ばした児童生徒割合」は、<国語>埼玉県が、72.9%に対し、本校は83.2%、<算数>埼玉県が81.5%に対し、本校は84.2%となっている。これは6学年についても同様の傾向が見られる。
- ◎ 主体的・対話的な学びの視点による授業改善を進めることにより、問題解決的な学習の過程を共通理解し、全教師が実践できるようになった。
- ◎ 情報端末活用のための研修を多く取り、また、職員ひとりひとりの実践の交流により、様々な活用方法が実践され、どのような学習過程の中でどのような使い方をすれば良いかが、少しずつ解明されてきている。
- ▲ 学力は大きく伸びているものの、得点力はまだまだ低迷しており、さらに継続した取組が必要である。埼玉県学力学習状況調査での学力レベルは、4年生国語、県が6-Aに対し本校は6-C、算数、県が5-Aに対し本校4-A。5年生国語、県が6-Aに対し本校は6-C、算数、県が6-Bに対し本校5-B。6年生国語、県が7-Bに対し本校は7-B、算数、県が7-Cに対し本校6-A。
- ▲ 埼玉県学力学習状況調査の結果分析をさらに精密化し、授業へのフィードバックの正確性を高めていく必要がある。

# 「Chromebook の活用による主体的・対話的で深い学びの実現」

川越市立新宿小学校

## 研究のポイント

- Chromebook、Google Workspace for Education を活用した授業作りを、主に国語科において研究した。
- 意見の集約、協働作業が簡単に行える特性を生かした、主体的・対話的で深い学びを実現する授業の枠組みを、新たに考えることができた。

## 1 研究の概要

### (1) 研究のねらい

- ① GIGA スクール構想に伴い導入された Chromebook と Google Workspace for Education を用いて、主体的・対話的で深い学びの実現を図ること
- ② そのために必要な、授業作りの枠組みを創出すること

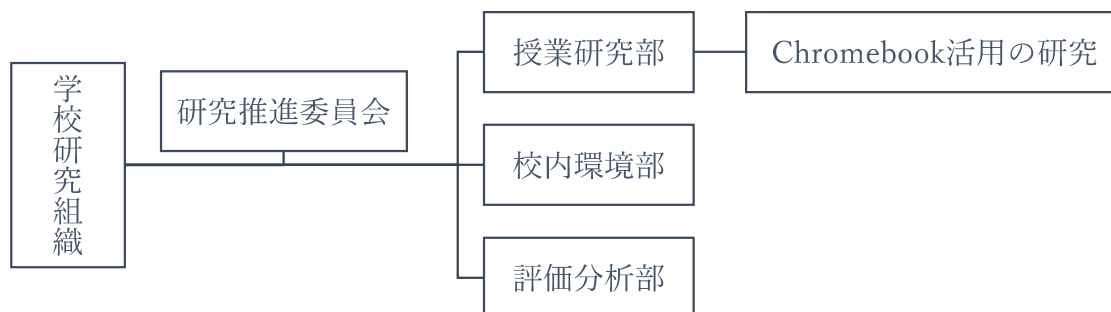
### (2) 研究主題設定の理由

令和3年度から本格的に導入された Chromebook と Google Workspace for Education の活用においては、どの学校も手探りの状態である。そのため、どのような活用方法があるのかという知見が蓄積されておらず、活用に対して消極的な考えを持つ教員も中には見られた。

そこで、本研究では国語科における Chromebook 活用を学校研究の柱へと位置づけ、考えられる活用方法やその事例について、取り組みながら知見を得ていくことを目的とした。その中で、国語科における主体的・対話的で深い学びの実現を図るための活用方法についても検討を行い、授業作りの枠組みが出来上がるよう、研究をデザインした。

### (3) 研究組織

本研究においては、学校研究の一環として位置づけており、以下のような組織を構成した。



Chromebook 活用の研究においては、授業研究部の中での研究として取り組みを進め、研究授業における Chromebook 活用や普段からの活用についての研究・研修の実施を行った。

## 2 研究の内容

### (1) Chromebook 活用に関する研修の実施

学校研究の時間を活用して、Chromebook の活用に関する研修を実施した。

- Classroom の作り方
- Google Meet の基本的操作方法
- Jamboard の使い方
- フォームでの意見の集め方
- 集めた意見をテキストマイニングにより可視化する方法 など

### (2) 国語科の研究授業における Chromebook 活用の視点取り入れ

### (3) 活用事例の蓄積・分類・整理

### (4) 授業以外における活用の推進

### (5) 市内への広報

- ① 教育フェスタ KAWAGOE での事例発表
- ② 川越市教育研究会レポート発表での事例発表

## 3 実践事例

### (1) Chromebook 活用に関する研修の実施

教職員による Chromebook 活用が円滑に行われるように、研修を実施した。

#### ① Jamboard の使い方

「新宿小のキャッチコピーを考えよう」と題して、背景に思考ツールを設定し、意見の拡散→収束を全職員で体験した。

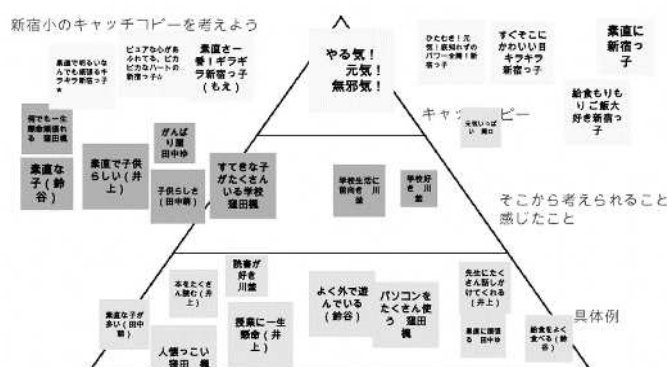


図 1 作成した Jamboard の例

新宿小においては、ホワイトボードや付箋紙を用いた意見の拡散・収束について今までの学校研究で取り組んでいたため、ツールが変わっただけで、やることは一緒であり、導入しやすい事などが意見としてあがった。

#### ② フォームでの意見の集め方

大造じいさんとガンの初発の感想を集めるという設定で、フォームによる意見の集め方と、テキストマイニングの方法について研修を実施した。

初発の感想を基に授業を進める単元構成は、国語科において多く採り入れられている。しかし、それぞれの初発の感想を網羅的に可視化することはなかなか難しかった。この方法を用いることで、初発の感想に頻出している特徴的なキーワードを可視化することができ、指導に効果的に生かすことができることが分かった。



図 2 作成したフォームの例

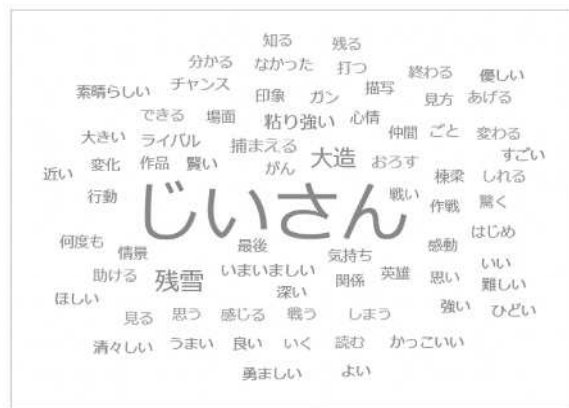


図 3 テキストマイニングの例

## (2) 国語科の研究授業における Chromebook 活用の視点取り入れ

研修によって身につけた ICT 活用事例を基にし、国語科の学習でどのように取り入れて行くかについての研究を行った。研究授業においては、Chromebook の活用の視点を指導案上にも明記し、活用方法について検討を行った。

研究授業では、主に Jamboard を用いた意見の集約が多く行われていた。

以下の例は、提示された文を分析的に読み、教科書教材との違いを出し合ったものである。

8〜21段落が、上のような場合と、教科書と、どんなところが違いますか？

5班

1段落ずつ長い小山巧人

結果の第四の段落が2つ、一様な文になっている

薬間に関係のないうちの段落で入っている動物

教科書にはない人物のことでないで済んだ。

どれが大事なのか分らない！！

図 4 班で作成した Jamboard の例

## (3) 活用事例の蓄積・分類・整理

研究授業において使われた Chromebook の活用事例を分析した結果、導入時と展開時に用いられることが多いことが判明した。

導入時には、意見の集約を行い、そこに出された意見から本時の課題を設定する場面での活用が多く、展開時には自分たちが調べた考えや考えた意見を班ごとに拡散的に出し合い、収束される場面での活用が多かった。いずれの場面においても、子どもたちが出し合った意見から課題設定や展開が構成されていくため、主体的・対話的で深い学びの実現に繋がっていると考える。

## (4) 授業以外における活用の推進

授業以外における活用を推進するため、クラブや委員会、児童会活動、学級活動、

学校行事などにおいても Chromebook を活用した。

## (5) 市内への広報

### ① 教育フェスタ KAWAGOE での事例発表

「Chromebook を用いた授業実践の事例」と題して発表し、市内への周知を図った。



図 5 発表資料

### ② 川越市教育研究会レポート発表での事例発表

「Google Workspace For Education 新宿小の実践」と題した発表を行った。

その後、国際大学 GLOCOM の豊福晋平先生による指導講評をいただいた。



図 6 豊福晋平先生による発表資料より引用

## 4 研究の成果と課題

本研究の成果と課題は以下の通りである。

### (1) 成果

- ・ 教員による Chromebook 活用が図られたことで、児童が活用する回数も増加し、ICT 活用スキルが向上した。
- ・ 国語科における学校研究の一部として取り組むことで、全教職員が Chromebook を活用した授業作りを行えるようになった。

### (2) 課題

- ・ 全職員による実施のためには、研修の機会・時間の確保が必要不可欠であるが、その時間を捻出することが難しい。
- ・ Chromebook を活用した授業作りにおいては、意見の集約や交流、協働作業が簡単に行えるという利点を考えると、その利点を生かすために今までの授業作りの枠組みを考え直す必要性が生じる。
- ・ 経験を積んだベテランほど、授業の枠組みがしっかりとしているため、一から考え直すことに対する抵抗感が高い。



# 「単元全体を通じた『主体的・対話的で深い学び』の実現について」

～令和3年度 重点支援校としての取組～

川越市立山田中学校

## 1 はじめに

※令和2年度埼玉県学力・学習状況調査の結果から見えた山田中生徒の実態

- 国語は小6で県を上回り、中1・2で同等レベルである。
- ▲算数・数学は学年が上がるごとにレベル差が開いている。
- ▲英語は、県とのレベル差が三段階開いている。
- ▲どの学年も努力調整方略(R1→R2変化量)に課題がある。(小6:-0.2 中1:-0.1 中2:-0.3)

**どの教科でも、単元のまとまりを通して授業を組み立てることが必要！**

**・学びは、子どもの問題意識から始まり、対話・協働を通して最後は子どもに戻り、自身で深めていくもの（授業スタンダードの定着が必要！）**

## 2 実態把握をもとにした研究の仮説

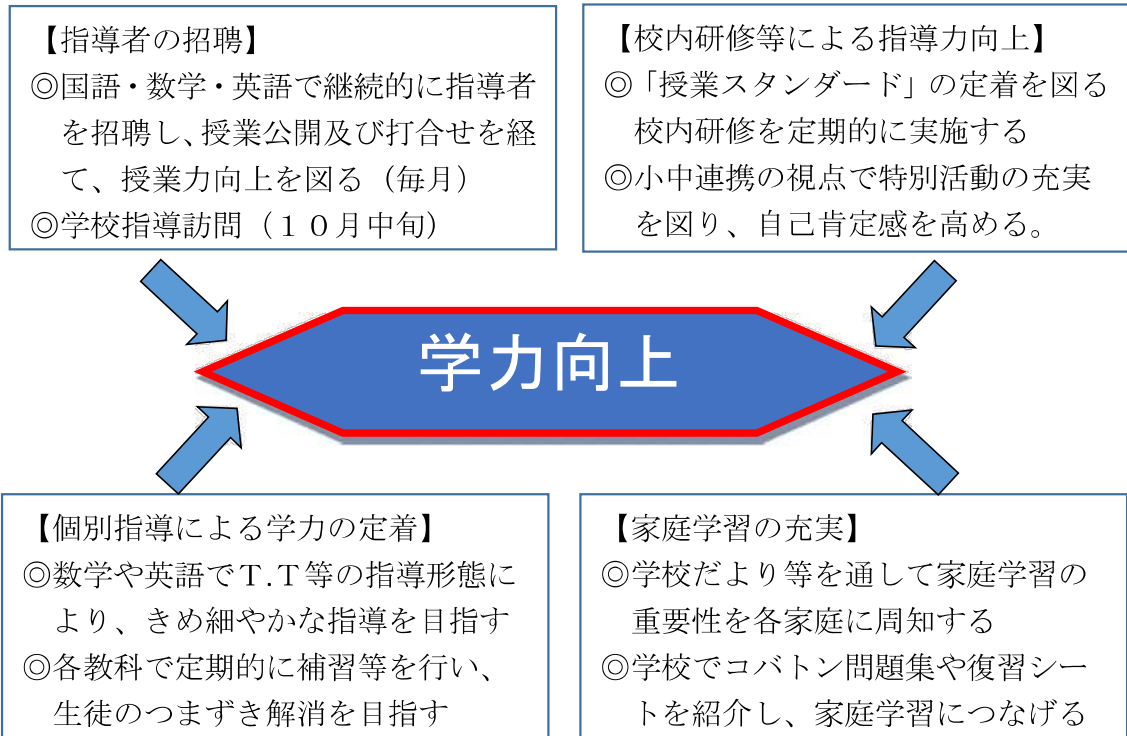
- (1) 川越市小・中学生学力向上プランに基づく「授業スタンダード」による授業改善を通して、教員の指導力を向上させることで生徒の学力向上を図ることができる。
- (2) 教員が授業改善における「主体的・対話的で深い学び」と特別活動に力を入れることで、生徒の自主性を伸ばし、「非認知能力」「学習方略」を向上させ、学力向上につながられる。
- (3) 各教科における知識・技能について集中的に学ぶ場を設定することで、生徒の基礎・基本の定着を図ることができる。
- (4) 学んだことを家庭でも学び直したり深めたりする時間を増やすことで、生徒の基礎・基本の定着を図ることができる。

## 3 学力向上に向けた具体的な方策

- (1) 学力向上に係る校内研修を実施し、各教科で「授業スタンダード」の定着を図る。
  - ① どの教科でも単元を見通した学習を意識する。
  - ② 「めあて・見通し」の提示、「学び合い」「まとめ・振り返り」を行う。
  - ③ 「めあて」「まとめ」の板書、「見通し」「学び合い」等における情報端末の有効活用を行う。
- (2) 「『授業スタンダード』を意識した授業記録シート」を活用し、教員同士で授業を見合う場を設定する。
- (3) 学級活動や生徒会活動を通して生徒一人一人に役割をもたせ、自己肯定感を高める。
- (4) 小学校と連携し、小学校で培った学級活動における話合いの進め方を中学校の学級活動でも継続し、集団決定・自己決定の機会を通して、生徒の自主性を伸ばす。
- (5) 基礎・基本の定着を図る学習時間を意図的に設定し、コバトン問題集や復習シートを活用する。
- (6) 家庭学習の重要性を各家庭に周知し、家庭での学習時間の確保を図る。

(7) 各教科で振り返ったことを家庭学習の時間に学び直す習慣を定着させる。

【イメージ】



#### 4 実際の取組について

(1) 学力向上校内研修の実施

- ①令和3年 5月10日（月）  
 16:00～16:30  
 「令和3年度川越市小・中学生学力向上プランについて」  
 ※授業スタンダードとあわせて校内で作成した「授業記録シート」の周知も図った
- ②令和3年 8月23日（月）  
 9:00～10:00  
 「令和3年度埼玉県学力・学習状況調査結果概要について」
- ③令和3年11月 1日（月）  
 16:00～16:30  
 「令和3年度埼玉県学力・学習状況調査の活用について」
- ④令和3年11月29日（月）  
 16:00～16:30  
 「授業力向上に向けた今後も継続が必要な視点について」【「授業スタンダード」を意識した授業記録シート】

「授業スタンダード」を意識した授業記録

月 日( ) 授業者: \_\_\_\_\_ 教科・単元: \_\_\_\_\_

段階	授業改善の視点	本時の様子
めあて・見通し	<input type="checkbox"/> 本時のめあてを黒板へ提示 <input type="checkbox"/> 前時のふり返りは短時間（詳しくは「見通し」の段階で） <input type="checkbox"/> 課題解決のための見通しを立てさせる（方法・手順・結果・時間等）	
学び合い／練習	<input type="checkbox"/> 課題解決の爲の思考時間確保 <input type="checkbox"/> 主業問の精選 ・学級全員に思考させているか？ ・一部の生徒との問答だけで進んでいないか？ <input type="checkbox"/> 生徒の考えを可視化する手段 ・ホワイトボード ・ネームプレート ・ふせん 等 <input type="checkbox"/> 可視化したものを活用した意見交流 ・ペア、3～4人程度のグループ <input type="checkbox"/> ファシリテーターとしての役割 ・各組の発表が終わっていないか ・問いかけ、問い直しによって考えや意見を引き出す ・生徒同士の考えをつないだり比べたりする ・合意に向けて論点を整理する 【練習の場面】 <input type="checkbox"/> 活動時間の確保 <input type="checkbox"/> やらせっぱなしにせず適度に確認	
まとめ・ふり返り	<input type="checkbox"/> まとめは、対話・協働を通じて、学んだことの整理や確認 ・「めあて」と対になっているか？ ・「学び合い」からつながっているか？ <input type="checkbox"/> ふり返りは一人称で学び直す時間 ・授業時間内に行う ・ノート等に書かせる	

(2) 学力向上授業研究の実施（重点支援校における授業公開・授業研究）

①国語科授業研究 1年1組 河口隼人 教諭

単元名「話の構成を工夫しよう」令和3年6月10日（木）

単元名「指示する語句と接続する語句」令和3年7月16日（金）

単元名「音読を楽しもう いろは歌」令和3年10月19日（火）

単元名「『不便』の価値を見つめ直す」令和3年11月30日（火）

単元名「少年の日の思い出」令和4年1月19日（水）

単元名「構成や描写を工夫して書こう」2月2日（水）

※新型コロナウイルス感染拡大の状況により、中止となった



②数学科授業研究 2年3組 五味 幸 教諭

単元名「連立方程式」令和3年6月2日（水）9日（水）15日（火）22日（火）  
25日（金）

単元名「一次関数」令和3年7月9日（金）、9月30日（木）、10月4日（月）  
19日（火）

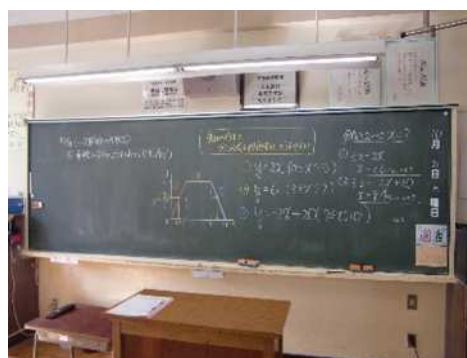
単元名「平行と合同」令和3年11月18日（木）、12月3日（金）6日（月）

単元名「三角形と四角形」令和3年12月10日（木）13日（月）14日（火）  
20日（月）

令和4年1月14日（金）18日（火）、2月4日（金）

単元名「確率」令和4年2月8日（火）18日（金）

※新型コロナウイルス感染拡大の状況により、中止となった



③英語科授業研究 2年2組 薬師神沙耶 教諭

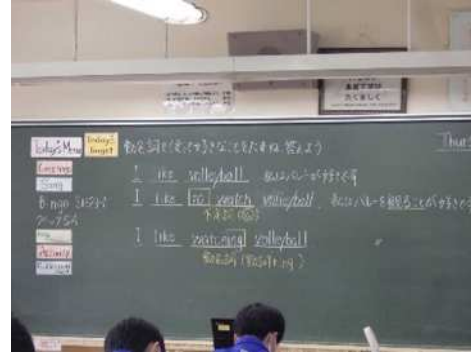
単元名「Unit2 Food Travels around the World」令和3年6月8日（火）

単元名「Unit3 My Future Job」令和3年10月4日（月）

単元名「Unit4 Homestay in the United States」令和3年10月21日（木）  
27日（水）

単元名「Unit5 Universal Design」令和3年11月5日（金）

単元名「Unit6 Research Your Topic」令和3年12月8日（水）  
令和4年1月14日（金）



(3) 校種間連携による学力向上に向けた取組

①山田小・中による研修会の実施（オンライン）

・小中連携した教科部会

5 研究の成果と課題

(1) 成果

- 「授業スタンダード」については、全教員の定着というところまでは至っていないが、どの教科でも、「めあて」の提示や「振り返り」時間の確保等、校内でかなり浸透しているので、引き続き継続していく。
- 「学び合い」の場面において、多くの教科で、ICTを話し合いや活動等の手段として活用できる場面が増えつつあるので、引き続き継続していく。
- 様々な教科で、つまずきのある生徒を対象とした補習を実施する機会が増え、補習に臨む生徒は粘り強く学習する姿が見られたので、引き続き継続していく。

(2) 課題

- ▲単元全体を通して生徒に身に付けさせたい力を意識して指導するために「見通し」の場を充実させることが急務である。
- ▲生徒への主発問や切り返しの発問をさらに充実させて、生徒自らが本時で学んだことを「まとめ」の場面で意識できるようにすることが急務である。
- ▲小中連携の視点による特別活動の充実はまだ至らなかったため、今後も特別活動の実践を継続し、生徒の自己肯定感を高める。

# 川越市立教育センター

令和4年3月発行

〒350-0001

埼玉県川越市大字古谷上6083-10

TEL (049) 235-7591

FAX (049) 230-1023



川越市マスコットキャラクター  
ときも